国立国語研究所学術情報リポジトリ

島根県雲南市木次町

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平子, 達也, 小西, いずみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003551

島根県雲南市木次町*

平子達也 [a]　　小西いずみ [b]

[a] 南山大学／国立国語研究所 共同研究員

[b] 東京大学／国立国語研究所 共同研究員

1. 地域の概要

本稿が記述の対象とするのは，雲南市木次町の方言（以下，木次方言）である。雲南市は，2004 年 11 月に大原郡大東町・加茂町・木次町・飯石郡三刀屋町・掛合町・吉田村が新設合併し，誕生した。その名が示す通り，律令制国の出雲国の南部に位置している。木次方言は，出雲方言と呼ばれる島根県東部の出雲地域で話される方言の 1 つである。島根県の方言は大きく，東部の出雲方言，西部の石見方言，隠岐諸島で話される隠岐方言に分けられるが，このうち出雲方言と隠岐方言とは，鳥取県西部で話される西伯方言と言語的特徴のいくつかを共有しており，まとめて「雲伯方言」と呼ばれている（図 1 参照）。

図 1：雲南市及び木次町の位置

雲南市のホームページにある情報を元にすれば，雲南市の人口は 2021 年 8 月末現在で 36,609 人であり，このうち木次町域の人口は 8,284 人である[1]。筆者らの現地での見聞や調査協力者の方々から聞く話から推測すると，当地域の伝統的な方言を流暢に話すことができる世代は若くても 65 歳以上の世代であろう。2015 年に行われた国勢調査では当地域の 65 歳以上の人口は 3,048

* 本稿執筆にあたり，現地での調査では調査協力者の方々をはじめとする地元の皆さんに大変にお世話になった。特に，筆者らの調査に何度も協力してくださった，板持千美さん，周藤光恵さん，為石正三さん，土江和良さん（五十音順）に，心からの御礼を申し上げる。また，日登交流センターの皆さんには，調査場所の提供をはじめ，我々の調査に際して，さまざまに便宜を図っていただいた。心より感謝申し上げる。調査は，筆者 2 名が中心に行ったが，今回扱うデータの中には，友定賢治氏（広島県立大学）と野間純平氏（島根大学）とによって収集されたものも含まれる。両氏と筆者らとは，木次方言を含めた出雲地域諸方言と隠岐島都万方言の調査を数年来合同で行っている。友定，野間両氏にも心から感謝申し上げる。また，誤字・脱字の指摘に至るまで，本稿の内容に丁寧かつ有益なコメントをくださったお二人の査読者の方にも感謝申し上げる。当然のことながら本稿内における如何なる誤りも筆者らの責任によるものである。なお，本稿は国立国語研究所合同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」の成果である。また，筆者らが科学研究費補助金 17K13465・17K02777・19H01255・20H00015 の支援を受けて行った研究成果の一部でもある。

[1] https://www.city.unnan.shimane.jp/unnan/shiseijouhou/jouhoukoukai/toukei/jinkou.html（2021 年 10 月 5 日最終閲覧）。

人で，当時の木次町域全体の人口 8,650 人に占める割合は 35.2%である[2]。これを 2021 年 8 月現在の数字に当てはめれば，65 歳以上の人口は 2,900 人程度ということになる。

本稿で用いるデータは，筆者らが木次町在住の方々を対象に行った現地調査，オンライン調査・電話調査によって得たものである。調査に協力してくださった方々は年齢順に，A 氏（昭和 5 年生・男性），B 氏（昭和 7 年生・女性），C 氏（昭和 11 年生・男性），D 氏（昭和 12 年生・男性）の 4 氏である。個別の現象を見れば，上記の方々の使う言語も当然一様ではない。例えば，2 節で述べる音韻論に関わるところでは， /i/ と /u/ の区別が特定環境下で失われる中和現象や，中舌母音 [ɨ] の現れ方などに個人差が見られた。上記 4 氏全員の両親が木次町出身者であることなどを考慮すれば，そうした個人差は当該地域内における社会的な変異に起因するものとも考えられるが，その詳細は明らかではない。本稿内でも 4 氏の個人差について言及するところがあるが，基本的には 4 氏から得られた情報を等しく木次方言のものとして扱うこととする。その変異のあり方についての議論はひとまず保留する。

2. 音韻論

2.1 音素目録

木次方言の母音音素は表 1 に示す 5 つである。また，子音音素は表 2 に示す 15 音素を認める。

表 1. 木次方言の母音音素

	前	後
狭	i [i~ɨ]	u [ɯ]
	e [e~ę]	o
広	a	

表 2. 木次方言の子音音素

		両唇音	歯(茎)音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
破裂音	無声	p	t		k	
	有声	b	d		g [g]	
破擦音	無声		c [ts~tɕ]			
	有声		z [dz~dʑ~z~ʑ]			
摩擦音			s [s~ɕ]			h [h~ɸ~ç]
共鳴音	鼻音	m	n [n~m~ŋ~ɴ]			
	接近音	w		j		
	はじき音		r [ɾ~l̠]			

[2] https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&bunya_l=02&tstat=000001080615&cycle=0&tclass1=000001089055&tclass2=000001089057&tclass3=000001089091&stat_infid=000031471155&cycle_facet=tclass1%3Atclass2%3Atclass3&tclass4val=0（2022 年 1 月 17 日最終閲覧）。

以下，特に問題になる事柄について述べる。

2.3.1 でも述べるが，/c, z, s/ の後では，/i/ と /u/ の対立はない。/c, z, s/ の後には /i/ しか現れず，[ɨ] で実現する。また，/c, z, s/ 以外の子音，特に /k, g/ の後でも，基底表示（形態素レベル）では //u// と考えられるものが, 表層において /i/ とすべき中舌母音 [ɨ] で現れることがある（例: //ek-u// → /eki/ [ekɨ]「行く」）。ただ，この現象は，全ての話者に見られるものではない。また，同一の話者でも中和が生じる語とそうでないものがある。同一の話者が同一の語を発する場合でも，常に基底の //u// が /i/ [ɨ] となるわけでもない。世代差や場面によるスタイルの違いなど，様々な要因が考えられるが詳細は不明である。なお，/i/ は，/k/ や /g/ の後に現れる場合，[kˢɨ] や [gᶻɨ] などのように摩擦噪音を伴ったり，[k͡çɨ] のようにその子音が破擦音で現れたりする（例：/kinnjo/ [k͡çɨ̞nnʲo]「昨日」）。

/i/ は /u/ とともに，無声子音の後で無声化することが多い（例 : /ecigo/ [etɕɨ̞go]「苺」）。非狭母音の /a/, /e/, /o/ も無声子音に囲まれた環境で無声化することがある（例 : /bankata/ [baŋkɑ̥ta]「夕方」）。

/u/ は語頭に現れない。標準語の語頭 /u/ は，この方言では原則として /o/ が対応する（例：/osi/ [osɨ]「牛」）。また，/i/ が語頭に現れることは稀だが，/i/ 「湯」などの例がある。なお，標準語の語頭の /i/ に対応するものは，この方言では原則として /e/ で現れる（例 : /ema/ [ema]「今」）[3]。

/s/ と /z/ の硬口蓋化異音 [ɕ] と [dʑ~ʑ] は，それぞれの子音に /i/ か /e/ あるいは /j/ が続く場合に見られる。一方，無声破擦音 /c/ の硬口蓋化異音 [tɕ] は，/i/ か /j/ が続く場合にしか現れない（音声的なものを除けば，この方言に /ce/ とすべきものはない）。なお，半母音 /j/ は /a/ と /o/ と /e/ の前にのみ現れ（例 : /jee/ [jeː]「家」），/i/ の前には現れない。/u/ の前には稀に現れるが, 多くの場合, 標準語の /Cju/ はこの方言で /Ci/ が対応する（例 : /giinii/ [gɨːnʲɨː]「牛乳」）。また，/w/ は /a/ の前にのみ現れる。

/hitoci/[çɨ̞totsɨ̞] ~ /hutoci/ [ɸɯ̞totsɨ̞]「一つ」など，いくつかの語彙では /hi/ [çɨ] と /hu/ [ɸɯ] とで揺れるものがあり，両音節は対立しないようにも思われる。一方で，/koohii/ [koːçɨː]「コーヒー」などの例のように外来語ではあるが /hi/ [çɨ] しか許容されない語彙もある。ここでは，両音節の区別はあるものと考えておく。上記の /hitoci/ [çɨ̞totsɨ̞] ~ /hutoci/ [ɸɯ̞totsɨ̞]「一つ」のような例は，（意味としては対立しないが）語形として対立する 2 つの形式が併用されているものと見る。

二重母音 /ai/ と /oi/ は音声的には [ae~aẹ] あるいは [oi~oi̯] で実現する（/kai-ta/ [kaeta~kaẹta]「書いた」）。長母音は同じ母音音素が 2 つ並んだものとして解釈する。また，いわゆる促音・撥音についてはそれらを特に音素として設定せず, 促音は後続子音と同じ子音として, 撥音は /n/ が音節末に現れた際に後続の分節音に調音点同化して現れたものとして解釈する。語末を含むポーズの前に /n/ が現れた際には [ɴ] で実現する。

[3] ただ，これらはあくまで「伝統的な方言による発話」の場合であって，本稿内で扱うデータの中にも，標準語の語頭の /u/ や /i/ に対応するものが，木次方言の形式としても /u/ や /i/ で現れているものがある。これらは，この方言が少なからず標準語に影響を受けていることを示すものであると考えられる。

2.2　音節構造とモーラ

2.2.1　音節構造

木次方言で許される音節構造は，C を子音，G を渡り音，V を母音とすれば，$(C_1)(G)V(V)(C_2)$ と示すことができる。

G のスロットに立ちうるのは /j/ か /w/ である。G に /j/ が立つ時，C_1 は /j, w/ 以外である。V は基本的に /a/ か /o/ であるが，/u/ が立つ場合もある（例：/jakjuu/ [jakʲɯː]「野球」）。一方，G に /w/ が立つ時，C_1 は /k, g/ のいずれかに限られる（例：/kwasi/ [kʷasɨ]「菓子」）。

現在手にあるデータの範囲では, C_2 には鼻音 /n/ に加えて /p, t, k, c, s, w/ が立ちうる。ただし，/n/ 以外が語末に現れることはない。

2.2.2　モーラ

上述した$(C_1)(G)V(V)(C_2)$の中で，モーラを担うのは V と C_2 である。この方言には一般に「最小語制約」と呼ばれる「（音韻）語は 2 モーラ以上で実現せねばならない」という制約はない。すなわち，1 モーラの語が単独で発話され得る（例：/te/ [te]「手」）。

2.3　主な音韻規則・形態音韻規則

この後の記述の中で特に重要となるものを中心に主な音韻規則・形態音韻規則を提示し，同時に本稿における表記の方針なども説明する。

2.3.1　/u/ と /i/ の中和

既に述べたとおり，この方言においては /s, c, z/ の後で /u/ と /i/ とは対立をせず，全て /i/ として実現する。例えば，動詞基本形（非過去形）の接辞は，基底（形態素）レベルでは //(r)u// とせざるを得ない（例：/tob-u/ [tobɯ] '飛ぶ-NPST'「飛ぶ」）。しかし，子音語幹型動詞（C 動詞）で語幹末子音が s の動詞は表層において /das-i/ [dasɨ] '出す-NPST'「出す」などと実現する。「本来，基底にある区別が表層において失われる」現象を中和と呼ぶならば，これは中和の 1 つと見て良いだろう。形式化すると以下のようになる。

(1)　/u/ と /i/ の中和規則

　　//u// → /i/ [ɨ] / {s, c, z}_

なお，これも既に述べたが，話者によって，あるいは，スタイルによって上述の中和規則の適用範囲が拡大し，例えば，//ek-u// '行く-NPST'が /eki/ [ekɨ] と実現する場合もある。

2.3.2　r の隠在化

木次方言を含む出雲方言の（形態）音韻論において，中舌母音の扱いと並んで問題となることの 1 つが「r の隠在化」（友定 2008: 6）である。友定（2008: 25）などでも指摘されるように，

/kuruma/ ~ /kuuma/「車」，/torikago/ ~ /tookago/「鳥籠」の如く，/Vru/ と /Vri/ はどちらも /VV/ と交替する[4]。松江市方言や出雲市方言について上野（1981: 119; 2016: 28）が述べているように，/r/ を含む形式と含まない形式とはおそらく話者の中では結びついているものと考えられる。ここでは，上野（1981: 119）の考えに従い，r を含む形式を基底形とした上で，2 つの形式を「場面に応じて使い分けられている」併用形と考えておく。

(2)　r の隠在化

//Vru//, //Vri// → /Vru/, /Vri/ ~ /VV/

なお /r/ は，特に /i/ や /u/ の前で反り舌の側面音 [ɭ] として実現する。

2.3.3　//au// と //ou// の長母音化

この方言で二重母音と呼べるものは /ai/ [ae~aẹ] のほか /oi/ [oi~oị] があり，その他の二重母音はないと言って良い[5]。

C 動詞で w を語幹末に持つ *kaw-*「買う」や *jow-*「酔う」の動詞基本形は，//kaw-u// → /kau/, //jow-u// → /jou/（w が表層で u の前に立たないことについては 2.1 参照）のように，表層において /au, ou/ という音素連続が生じることが予測されるが，実際は /kaa/，/joo/となる。これについて，以下のような音韻規則を想定する。

(3)　//au// と //ou// の長母音化

//au// → /aa/ [aː]

//ou// → /oo/ [oː]

なお，この方言では，日本語史上において「オ段長音の開合」と呼ばれるものの区別が保持されている。例えば，*au（< **amu）由来とされる C 動詞の意志形は *kak-a(a)* '買う-VOL' などとなって開音には /a(a)/ が対応する一方，合音には /oo/ が対応する（例：*ookina*「大きな」）。

---

[4] 指示代名詞 /kore/「これ」，/sore/「それ」，/are/「あれ」と疑問代名詞 /dore/「どれ」，/dare/「だれ」に限って，/r/ の後の母音が /e/ であっても，それぞれ *koo*, *soo*, *aa*, *doo*, *daa* という r が隠在化した形式が見られる。また，これらの指示・疑問代名詞の場合も含め，2 モーラ名詞における r の隠在化は，名詞単独の場合よりもその後ろに助詞類やコピュラを伴う場合に起こりやすい。一方，3 モーラ以上の名詞の場合には，/r/ が語末音節にあっても名詞単独の場合で r の隠在化が起こる（/kemuu/「煙」など）。なお，2 人称代名詞の *waa* は，歴史的には*ware という形式が r の隠在化を経て生じた形式だと考えられるものの，*ware という形式はなく，*waa* で固定化している。また，話者によっては受身・可能・尊敬の接辞である *-(r)are-* が *-(r)ae-* と実現することもあるが，それは *-raa-* とはならない。*-(r)are-* ~ *-(r)ae-* の交替は，r の隠在化とは別の現象であろう。受身・可能・尊敬については，それぞれ 8.5.1，8.5.4，8.8.1 を参照。

[5] なお，例文を中心とした本文中で ae と表記したものは，種々の理由により a と e の間に音節境界があると判断したものである。例えば，注 4 で指摘した *-(r)ae-* の場合は，その基底 *-(r)are-* の r が脱落したものであり，a と e は（少なくとも基底においては）別の音節にあるものと考えられる。

2.3.4　本稿における表記の方針

以下の記述においては，本文中で特に断りもなく語形を提示する際，表層の音素形（通常であれば，シングルスラッシュ / / で囲むもの）を斜体で示す。基底形を表示する場合にはダブルスラッシュ（// //）で囲む。例文表示の際には，1 行目に音素形で表記したものを可能な限り形態素に分けた形で提示し，2 行目に各形態素の意味や機能を表示する。例えば(4)の 1 行目では，基底で //mas-u// とすべき，丁寧形の非過去の形式を *mas-i* としている。これは「音素形で表記」するという原則に合わせ，/s/ の後で /i/ と /u/ が中和される（2.3.1）ことを反映した表記である。

(4)　*ima*　　*sinbun=Ø*　*mi-too-mas-i=wa*
　今　　新聞=ACC　見る-CONT-POL-NPST=SFP
　今，（私は）新聞を見ていますよ。

略号の一覧は本稿末に提示した。なお，3 行目は標準語訳である。

2.4　アクセントとイントネーション

2.4.1　アクセント

木次方言のアクセント体系は，下げ核の有無と位置が弁別的な多型アクセント体系で，n 拍のアクセント単位に可能なアクセント型のパターンは n+1 個である。ただし，下げ核の音声的実現としてのピッチの急激な下降がどこに現れるかは，分節音環境に左右される。すなわち，下げ核の音声的実現は基本的に核のある拍の次の拍（以降）が低くなる形で実現されるが，語末の狭母音を含む拍（狭母音拍）が下げ核を担う場合，その音声的実現としては単純に語末拍から後続の助詞などに向かってのピッチ下降が見られるのではない。(5)に見る通り，同一文節内に後続する普通拍（非特殊拍）があれば，その下降はその普通拍から後続の拍にかけての下降として実現するのである。なお，例えば，助詞を介さない述語動詞のような文節が当該語の後ろに直接続く場合には，当該語の語末拍から後続の文節に向けてピッチの下降が観られ，後続の文節は全体として低く実現する（ここでは [でピッチの上昇を，] でピッチの下降を示す）。

(5)　「耳」（語末核型）のアクセント

mi[mi	耳
mimi=[ga] aa ~ mimi=[ga] a]a	耳がある
mi[mi] aa	耳（が）ある
mimi=[ka]ra	耳から

なお，類の統合パターン（類別体系）からは，1 ~ 3 拍名詞のそれぞれで 1・2 類が統合しており，外輪式アクセントに分類されるものと言える。具体的な例は，木次方言を含めた出雲諸方言の名詞アクセントの資料である平子（2017）に譲る。

動詞・形容詞のアクセントについては調査が不十分であるが，これまでの調査では，動詞については基本形の場合に平板型で現れるものと，同じく後から 2 モーラ目に下げ核を持つ起伏型のものの 2 つに分けられることが分かっている。形容詞のアクセントについては動詞の場合よりもデータが不足しているが，動詞と同様に平板型と起伏型の 2 つに分けられるものと考えられる。活用形のアクセントについてはデータ不足であり，今後の課題である。

複合語のアクセントについては，平子（2018）に複合名詞アクセントの資料がある。概して，前部要素が平板型であれば複合名詞全体も平板型となり，前部要素が起伏型であれば複合名詞全体も起伏型となると言える。ただし，前部要素が 3 モーラ以上あるいは複合名詞全体が 5 モーラ以上となると，前部要素のアクセントに関わらず，複合名詞全体のアクセントは起伏型になる。詳しい資料は，平子（2018）を参照されたい。

2.4.2　イントネーション

前述の通り，木次方言においては下げ核，つまり，ピッチの急激な下降が弁別的である。一方，ピッチの上昇は 2 拍目の後に観られるのが一般的であるが，2 拍目（及び 3 拍目）の分節音環境によってはその上昇位置が変動する。具体的には，以下の(6)のようになる。なお，Wは広母音拍（非狭母音拍），Nは狭母音拍，Mは長母音・二重母音の 2 拍目あるいは /n/（撥音），Qは重子音の 1 拍目（促音），△は無声化拍で，〇は任意拍を表わす（上野 2016 によった）。下げ核による下降の位置は問題にしていない。

(6)　上昇位置

(a)　〇[W〇、〇[ＮＮ、〇[ＮＭ　　2 拍目から

(b)　[〇M〇　　1 拍目から

(c)　〇N[W、〇Q[〇、〇△[〇　　3 拍目から

2 拍の語あるいは文節の場合は, (6)における最初の 2 拍を抜き出したパターンになる。ただし, (c)〇N[Wは〇Nとなるわけではなく, 直後に何もなければ（1 拍目にアクセント核が来ない限り）〇[Nとなる。上野の述べるとおり，この方言には上昇のない型は存在しえない。

一部〇M〇であるにもかかわらず(c)〇M[〇で現れる語がある。例えば，kuu[ma「車」，too[kago「鳥籠」などである。前述の通り，これらは基底において //kuruma//, //torikago// という〇NW に相当する形式を有している。これらの語における上昇位置はこの基底形を参照して決定されているものと考えられる。なお，一部〇Q〇であるにもかかわらず(b)[〇Q〇という型で現れる語も存在するが，その詳細は不明である。上野（2016: 27）も参照されたい。

このように分節音環境によってその位置が予測可能な語頭におけるピッチの上昇であるが，このピッチの上昇は，その語が「句」の先頭に来た時にのみ現れる。ここに言う「句」とは五十嵐（2021: 33）の言う「アクセント句」に相当するものであり，「文節の直上に位置し，音調によって区分された韻律的単位」と定義できる。木次方言においては，この「句」の切れ目を表すのが

ピッチの上昇である。なお，木次方言においては，上野（2016）が出雲市斐川方言について報告したようなイントネーションや，それに関連するとも思われる上昇後の音調特徴（下げ核によらない段階的下降）は確認されなかった。

文末のイントネーションについては，8.3.1 で述べるように，同じ疑問文であっても，終助詞=*ka* や =*no* が文末にあったり，動詞中止形 *-te* で終わる文であったりする場合には，文末イントネーションが上昇調でも下降調でも良いことが分かっている（例 7）。一方，疑問語疑問文の場合を含め，文末においてピッチが上昇する場合もある（例 8。「↑」が文末でのピッチ上昇を表す）。

(7) *ano kwasi=Ø omai=ga kut-te=ja*
あの 菓子=TOP 2=NOM 食う-SEQ=QP
あの菓子はお前が食べたの？

(8) *koko=a doko=da*(↑)
ここ=TOP どこ=COP
ここはどこなの？

3. 名詞・名詞句

3.1 名詞の内部構造

名詞語幹に続く接辞として認められるのは，敬称としての *-han, -san* と，複数接辞の *-nci, -danci, -ci, -raci, -jaci, -gata* があり，どちらともが名詞に続く場合には，敬称接辞 - 複数接辞の順に続く（例：*taroo-san-raci*「太郎さんたち」）。なお，*-han, -san* は，原則として人称代名詞を含む人間を表す名詞にしか接続しない。

表 3. 代名詞と固有名詞における複数接辞の分布[6]

	単数	複数
1 人称代名詞	*ora*	*ora-ci, ora-danci, ora-nci, ?ora-raci, *ora-jaci*
	adan	*adan-ci, ?adan-raci, *adan-jaci*
	wasi	*wasi-raci, wasi-jaci, wasi-taci*
2 人称代名詞	*omai*	*omai-ci, *omai-danci, omai-raci, omai-jaci*
	waa	**waa-ci, waa-raci, waa-jaci*
	anta	*anta-raci, anta-jaci*
固有名詞	*taroo*	**taroo-ci, taroo-raci, taroo-jaci*

複数接辞は全て，人称代名詞・指示代名詞（疑問代名詞 *doo*「どれ」, *daa*「誰」を含む）と，有生物を表す普通名詞にしか続かない。このうち *-gata* は *-han, -san* がついた形式など，敬意の対

[6] 表 3 における文法性の判断は D 氏に対する調査結果をもとにしたものであり，個人差がある可能性もある。

象となるものにしかつかない（例：*omai-han-gata*「あなたさまたち」）。ただ，*-han, -san* に *-gata* 以外の複数接辞が続く場合はある（例：*omai-han-ci*「あなたさんたち」）。

複数接辞として最も広く用いられるのは *-raci* であり，人称代名詞・指示代名詞，あるいは，有生物を表す普通名詞であれば，どの名詞にも接続しうる。ただ，複数接辞の分布の詳細は明らかでない。表 3 に示したように名詞との共起関係に幾らか偏りがあり，人称代名詞・指示代名詞，あるいは，有生物を表す普通名詞であれば，どの名詞にどの接辞が接続しても構わないということではない。特に *-ci* は，1 人称代名詞 *ora, adan* と 2 人称代名詞 *omai* にしか接続しない。

なお，体系的な調査は行えていないが，*o-*のような接頭辞の存在も確認されている（例：*o-isja-san*「お医者さん」）。

3.2　代名詞の構造と体系

人称代名詞を，発話場面において話し手（1 人称），聞き手（2 人称），それ以外（3 人称）を指示するのに用いられる専用の形式であるとするならば，木次方言においては 1 人称・2 人称代名詞のみが存在し，3 人称代名詞は存在しないと考えられる。3 人称の指示対象を代名詞で指示する場合には，指示代名詞（*aa*「あれ・あの人」，*konna*「あいつ・あれ」など），あるいは，指示連体詞に形式名詞が続いた形式（*ano si*「あの人」，*ano san*「あの方」など）が用いられる。指示代名詞などの指示語については疑問語とともに 7 節で記述する。

前節の表 3 に掲げた通り，1 人称・2 人称ともに複数の形式が存在するが，1 人称の 3 つの形式のうち *ora* が無標の形式として男女ともに用いられる形式であるのに対し，*adan* は女性が専ら用いる形式だとされる。また，2 人称の *omai* と *waa* とでは *waa* の方がやや卑語的であるという。表 3 以外に *gonta* という形式がある。これは蔑称として，相手を軽んじる場合や罵る場合などに用いられるが，通常の会話では使用されない。目上の人物に対しては *omai-han* ‘2-HON’など敬称をつけた形を用いる。なお，1 人称・2 人称の一部において，複数接辞がついた形式（e.g. *anta-raci* ‘2-PL’）が，単数を表すのに用いられることが確認されているが，その詳細は不明である。

再帰代名詞としては *wawwaa* があり，その複数形は *wawwaa-raci, wawwaa-jaci* である。また，再帰代名詞の連体修飾専用形式として連体詞 *waga* がある（例：*waga ie*「自分の家」）。

3.3　数詞

数詞は格助詞（3.4.2）を伴い，項となることができるなど（例 9），統語論的な振る舞いとしては普通名詞や代名詞と大きく重なる。

(9)　*hitoci=ga*　　*ee*
　　一つ= NOM　　良い.NPST
　　一つが良い。

一方，普通名詞や代名詞と異なり，(10)のように副詞句として用いられることがある。

(10) *kon* *naka=kara* *hitoci* *too=nara* *doo=ka=i*

この 中=ABL 一つ 取る.NPST=CND どれ=QP=SFP

この中から一つ選ぶならどれ？

数詞は，形態論的には数詞語幹と類別接辞をとる。以下の表 4 に示したのは，代表的な数詞である「～人」（人間）と「～つ」（物質一般の数を数えるのに使用）の 1~9 の表現の例である。

表 4. 数詞の表現の例

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
人	*hutoo*	*hutaa*	*san-nin*	*jottaa* *jo-nin*	*go-nin*	*roku-nin*	*hici-nin*	*haci-nin*	*ku-nin*
一般	*hito-ci*	*hutaa-ci*	*mic-ci*	*joc-ci*	*ici-ci*	*muc-ci*	*nana-ci*	*jac-ci*	*kokono-ci*

3.4 名詞句の構造

3.4.1 基本構造

名詞句において，主要部である名詞に先行するのは修飾部であり，修飾部には，名詞句・形容詞句・連体詞・連体節が立つ。また，格助詞ととりたて助詞は主要部の名詞に後続する。

3.4.2 格の種類と機能

これまでの調査では，以下の表 5 にある格助詞が確認されている。

表 5. 格助詞とその主な機能

格の名称	形式	格助詞としての主な機能
主格	*=ga / =no*	主語
属格	*=no / =ga*	名詞句の従属部
対格	*=Ø / =o*	直接目的語
与格	*=ni*	間接目的語，存在の場所
方向格	*=e*	移動の目標・方向
奪格	*=kara*	起点
具格	*=de*	手段，動作の場所
共格	*=to*	共同
比格	*=joo*	比較
限界格	*=made*	限界

3.4.2.1　主格と属格

主格と属格とは形式的に同じものが使われるが，その分布が異なっている。例文中のグロスについては，その分布の異なりと意味から，主格か属格かを判断している。すなわち，節中の主語を表す場合には NOM（主格）と，名詞修飾の場合には GEN（属格）としている。

主格の場合，主節においては，基本的に=*ga* が用いられ，=*no* が用いられるのは，それがマークする当該の文の主語が尊敬の対象である場合に限られる（例 11）。一方，連体節中の主語は，それが尊敬の対象となる場合には=*no* が専ら使われる一方（例 12），そうでない場合には=*ga* が用いられる（例 13）。

(11) {*sensee=ga* / *sensee=no*}　*ko-rae-ta*
　{先生=NOM / 先生=NOM} 来る-HON-PST
　先生がいらっしゃった。

(12) *era-i*　*si=no*　*iw-aee*　*koto=wa*　*joo*　*kik-i=ken=noo*
　えらい-NPST　SI=GEN 言う-HON.NPST　KOTO=TOP　よく聞く-NPST=CSL=SFP
　（あの子は）えらい人のおっしゃることはよく聞くからね。

(13) *taroo=ga*　*hukukaet-ta*　*toko=wa*　*koko=ka*
　太郎=NOM 倒れる-PST　TOKO=TOP　ここ=QP
　太郎が倒れた場所はここか？

なお，主節の主語が尊敬の対象であれば，必ず=*no* が許されるわけではない。特に(14)のように，格助詞の後に名詞句（*zjoozi=na zi*「上手な字」）が続く場合，=*no* が許容されない傾向がある。

(14) {*sensee=ga* / **sensee=no*}　*zjoozi=na*　*zi=Ø*　*kai-ta*
　{先生=NOM / 先生=NOM}　上手=COP.ADNL　字=ACC　書く-PST
　先生が上手な字を書いた。

属格の場合には=*no* が基本的に用いられるが，一人称代名詞の場合には=*ga* が用いられる。

(15) *asoko=ni*　{*ora=no* / *ora=ga*}　*tenugui=ga*　*oci-cjoo*
　あそこ=DAT　{1=GEN / 1=GEN}　手拭い=NOM　落ちる-CONT.NPST
　あそこに私の手拭いが落ちている。

平子（2016）では，出雲方言の他の方言で有生性の階層に従う属格=*ga* と=*no* の使い分けがあることを論じているが，木次方言でも同様の現象が見られるかは未確認である。

3.4.2.2　対格

対格=*o* は主に他動詞目的語を標示するのに用いられるが，友定（2008: 30）なども述べるように，出雲方言では全般に，他動詞目的語が無助詞（=*Ø*）で現れることが多い（例 17）[7]。

(16) *taroo=wa　joo　sara=o　meg-u=noo*
太郎=TOP　よく　皿=ACC　割る-NPST=SFP
太郎はよく皿を割るね。[8]

(17) *taroo=ga　terebi=Ø　mi-too=wa*
太郎=NOM　テレビ=ACC　見る-CONT.NPST=SFP
太郎がテレビを見ているよ。

3.4.2.3　与格

以下に示すように，与格=*ni* が表す意味役割は広く，発話の相手や着点，受益者，被使役者，変化の結果，直面する対象，受身文の動作主，経験者，所有者，時間，場所を表す。

(18) *taroo=wa　otooto=ni　hanasi+kake-ta*（発話の相手）
太郎=TOP　弟=DAT　話す+かける-PST
太郎は弟に話しかけた。

(19) *taroo=wa　kinnjo　oci=ni　modot-ta=ge=na*（着点）[9]
太郎=TOP　昨日　家=DAT　戻る-PST=LCTN=COP.NPST
太郎は昨日家に戻ったらしい。

(20) *taroo=wa　otooto=ni　waga　jee=o　jat-ta*（受益者）
太郎=TOP　弟=DAT　RFL　家=ACC　やる-PST
太郎は弟に自分の家をやった。

(21) *taroo=wa　otooto=ni　siki=na=hodo　jasai=o　kw-ase-ta*（被使役者）
太郎=TOP　弟=DAT　好き=COP.ADNL=RST　野菜=ACC　食う-CAUS-PST
太郎は弟に好きなだけ野菜を食べさせた。

(22) *taroo=wa　imo=Ø　hutaaci=ni　wat-ta*（変化の結果）
太郎=TOP　芋=ACC　二つ=DAT　割る-PST
太郎は芋を二つに割った。

---

[7] 本稿では，対格のマーカーとして=*Ø*を認め，グロス中にも反映させている。

[8] 例文中に現れる終助詞（SFP）及び終助詞の連続を共通語訳する際には，原則として 1 つ以上の終助詞として訳出する。その際，共通語に完全に当てはまる表現がない場合には，近似的に「よ」「ね」「ぞ」などとする。=*wa=ne*, =*ga=ne* など終助詞連続で逐語訳が困難な場合はあわせて 1 語で訳す。また，特に疑問文において終助詞を訳すと不自然な場合は訳さない。

[9] 後出の例 (109) *doko* {*ik-u=no* / *ik-u=tete*}「どこに行くの？」のように，着点を表す場合には=*Ø*（助詞なし）となることがある。現状では，その場合=*Ø*の与格（DAT）としている。ただし，同じような用法を持つ方向格=*e* も確認されている（例：(101) *hanako asita=kara doko=e ik-u=ka=i*「花子は明日からどこに行くの？」）。あるいは，着点を表す場合には=*Ø*（助詞なし）となるものは方向格として分析するべきかもしれない。

(23) *taroo=wa* *gakko=de* *tomodaci=ni* *at-ta*（直面する対象）
太郎=TOP 学校=INST 友達=DAT 会う-PST
太郎は学校で友達に会った。

(24) *taroo=wa* *otooto=ni* *bossjage-rare-ta* （受身文の動作主）
太郎=TOP 弟=DAT 追いかける-PASS-PST
太郎は弟に追いかけられた。

(25) *taroo=ni=wa* *ora=no* *kimoci=ga* *wakara-n=wa* （経験者）
太郎=DAT=TOP 1=GEN 気持ち=NOM 分かる-NEG.NPST=SFP
太郎には俺の気持ちが分からないよ。

(26) *taroo=ni=wa* *jome=ga* *ora-n=ga=ne* （所有者）
太郎=DAT=TOP 嫁=NOM いる-NEG.NPST=SFP=SFP
太郎には嫁がいないよ。

(27) *taroo=wa* *san-zi=ni* *oci=ni* *modot-ta* （時間）
太郎=TOP 三-時=DAT 家=DAT 戻る-PST
太郎は三時に家に戻った。

(28) *taroo=wa* *moo* *tookjoo=ni* *oo=ga=ne* （場所）
太郎=TOP もう 東京=DAT いる.NPST=SFP=SFP
太郎はもう東京にいるよ。

3.4.2.4 方向格

方向格の=*e* は移動の目標や方向を表す（例 29）。この時=*e* の他に=*ni* が用いられるかどうかは未確認である。また，存在の場所を表す場合もある（例 30）。

(29) *taroo=wa* *tookyoo=e* *de-ta=ga=ne*
太郎=TOP 東京=ALL 出る-PST=SFP=SFP
太郎は東京に出かけたよ。

(30) *ara* *koko=e* *nan=dai* *aa=ga=ne*
あれ ここ=ALL 何=QP ある.NPST =SFP=SFP
（独り言で）あれ，ここに何かあるぞ。

3.4.2.5 奪格

奪格=*kara* は，動作の起点を表すとともに，情報やものを与える授与者を表す。

(31) *taroo=wa* *oci=kara* *soto=e* *de-ta* （起点）
太郎=TOP 家=ABL 外=ALL 出る-PST
太郎は家から外に出た。

(32) *taroo=wa*　*oja=kara*　*zeni=Ø*　*morat-ta*　（授与者）
　太郎=TOP　親=ABL　金=ACC　もらう-PST
　太郎は親から金をもらった。

なお，(32)では *oja=ni* '親=DAT'として，与格を用いることはできない。

3.4.2.6　具格・共格・比格・限界格

具格=*de* は，手段や動作が行われる場所，あるいは，理由を表す（場所の例は前掲 23 参照）。

(33) *taroo=wa*　*sara=o*　*suidoo=de*　*arat-too*　（手段）
　太郎=TOP　皿=ACC　水道=INST　洗う-CONT.NPST
　太郎は皿を水道で洗っている。
(34) *taroo=wa*　*hoocjoo=de*　*ibi=Ø*　*kit-ta*　（理由）
　太郎=TOP　包丁=INST　指=ACC　切る-PST
　太郎は包丁で指を切った。

共格=*to* は動作をともに行う対象を表す。

(35) *taroo=to*　*otooto=ga*　*asobi-ni*　*iki-ta*
　太郎=COM　弟=NOM　遊ぶ-ADVL　行く-PST
　太郎と弟が遊びに行った。

比格=*joo* は比較対象を示す。とりたて助詞の=*mo* を伴うことが多い。

(36) *taroo=wa*　*otooto=joo=mo*　*se=ga*　*taka-i*
　太郎=TOP　弟=CMP=ADD　背=NOM　高い-NPST
　太郎は弟よりも背が高い。

限界格=*made* は動作の限界点を示す。

(37) *taroo=wa*　*oci=made*　*arui-te*　*in-da*
　太郎=TOP　家=LMT　歩く-SEQ　帰る-PST
　太郎は家まで歩いて帰った。

3.4.3 とりたて助詞・提題助詞

これまでの調査では，*=mo*（累加，ADD），*=(n)dai*（極限），*=demo*（例示，EXPL），*=nato*（例示），*=hodo*（限定），*=bakka(ri)*（限定），*=wa*（対比）などのとりたて助詞が確認されているが，体系的な調査には至っていない。格助詞との共起関係についても今後の調査課題であるが，今手元にあるデータの中に前出の(36)のように格助詞の後に接続する例は見られるが，その逆に格助詞の前にとりたて助詞が現れる例はない。

(38) *ara icimo wari koto=bakka kangae-too=ga=ne*
あれ.TOP いつも 悪い.NPST KOTO=RST 考える-CONT.NPST=SFP=SFP
あの人はいつも悪いことばかり考えているよ。

(39) *kaze=Ø hii-tor-a doko=dai ik-una=ja*
風邪=ACC 引く-CONT-CND どこ=EXT 行く-PROH=SFP
風邪を引いたら，どこにも行くな。

(40) *taroo=hodo ookena oto=o kii-ta*
太郎=RST 大きな 音=ACC 聞く-PST
太郎だけが大きな音を聞いた。

主題を提示する際には，標準語の「は」に相当する助詞*=wa* が用いられる場合が多いが，無助詞の場合もある。

(41) *ano kwasi=wa ora=ga kut-ta*
あの 菓子=TOP 1=NOM 食う-PST
あの菓子は私が食べた。

(42) *ano kwasi=Ø omai=ga kut-te=ja*
あの 菓子=TOP 2=NOM 食う-SEQ=QP
あの菓子はお前が食べたの？

助詞*=wa* は指示代名詞 *koo*（その基底形は //kore//）などに続く場合，前節の名詞の基底における末尾音節 //re// と融合し，*kora(a), sora(a), ara(a)*といった形式をとることがある。

(43) *kora daa-jaci=no kwasi=ka=ne*
これ.TOP 誰-PL=GEN 菓子=QP=SFP
これは誰（たち）の菓子か。

=wa の音声的変異形である*=a* も見られ（例 44），*koa* などの形式も見られる（例 45）。(46)の *ka* は *koa* の縮約形と考えられるが，*ka* と *koa* との使い分けなどについての詳細は不明である。

(44) *son*　*je=no*　*heja=a*　*nanbo*　*aa=ka=i*

その　家=GEN　部屋=TOP　幾つ　ある.NPST=QP=SFP

その家の部屋は幾つあるのか。

(45) *ko=a*　*daa=ka=i*

これ=TOP　誰=QP=SFP

これは誰か？

(46) *ka*　*daa=ka=i*

これ.TOP　誰=QP=SFP

これは誰か？

=wa が /ci/ や /si/ で終わる語の後についた場合には，*-cja(a)* などと末尾音節と融合することがある。

(47) *anta- jacja*　*dogena*　*je=ni*　*sumi-ta-i=ka*

2-PL.TOP　どんな　家=DAT　住む-DES-NPST=QP

あなたたちはどんな家に住みたいか。

3.4.4　名詞句の修飾部

名詞句の修飾部には，名詞句・形容詞句・連体詞・連体節が立つ。名詞句が修飾部に立つとき属格助詞=*ga/no* が修飾部と主要部との間に入るが，このとき=*ga* か=*no* のどちらを用いるかは，既に述べたように，原則として修飾部に立つ名詞（句）の有生性によるものと考えられる。その詳細については更なる調査が必要であるが，現在のところ，当該の名詞が一人称代名詞であれば=*ga* が用いられ，そうでなければ基本的には=*no* が用いられるというデータが得られている。

(48) *ora=ga*　*otooto=des-i=ga*

1=GEN　弟=COP.POL-NPST=SFP

私の弟ですよ。

(49) *ko=wa*　*omai=no*　*otooto=ka=ne*

これ=TOP　2=GEN　弟=QP=SFP

（写真を指しながら）これはお前の弟かね。

ただし，形式名詞（3.4.5）の *eci*～*jaci* を修飾するのに用いられる場合には，=*ga* の許容される範囲が，人間名詞一般にまで広がる。

(50) *soo=wa*　*taroo=ga*　*eci=da*
それ=TOP　太郎=GEN　ECI=COP
それは太郎のだ。

連体詞は専ら名詞句を修飾する。(51)の *ookina*「大きな」は連体詞で，語形変化しない。

(51) *ookina*　*bun=mo*　*hoso-i*　*bun=mo*　*jappari*　*docci=mo*　*hicijoo=da=wa=ne*
大きな BUN=ADD　小さい-NPST　BUN=ADD　やっぱり　どっち=ADD　必要=COP=SFP=SFP
大きな人も小さな人もやはりどちらも必要だよ。

連体節の節末の形式は，動詞・形容詞の場合は，非過去・過去の断定形（*-ru, -i, -ta* など）となる。形容名詞・名詞の場合も同様で，形容名詞では=*na*（例 52，非過去），=*natta*・=*dat-ta*（過去）が，名詞では=*no*（例 53，非過去），=*dat-ta*（過去）が，被修飾名詞に前接する。9.3 も参照。

(52) *mawaa=ga*　*sizika=na*　*uci*
周り=NOM　静か=COP.ADNL　家
周りが静かな家

(53) *ojazi=ga*　*isja-han=no*　*tomodaci*
父親=NOM　医者-HON=GEN　友達
父親が医者の友達

3.4.5　形式名詞

名詞句の主要部には代名詞や普通名詞の他，種々の形式名詞が立つ。表 6 にこれまで確認されている形式名詞とその用法をあげた。

表 6. 主な形式名詞と用法

	用法
si(i)	人一般を表す。
san	人を表す。主に目上の人物の場合に用いられる。
bun	事物一般を表す。人は表しにくい。
eci ~ jaci	人一般，物質一般を表す。
mon	人一般，物質一般を表す。
toki	時間的位置を表す。
toko	空間的位置を表す。
koto	事態を表す。

これらの形式名詞はほとんどが独立に使うことができない。その形態的な非独立性からすれば，「接語」とすべきものであるが，*toki*「時」や *koto*「事」のように独立して用いることができ，普通名詞と同じく「語」として扱うべきものもある。ここでは，全ての形式名詞について統一したグロスを振ることをせず，*si* であれば単に SI などとし，また，それが接語であるか語であるかにかかわらず，前の要素とは分かち書きして示す。なお，*mon, toki, toko, koto* の例については，それぞれ，(64)(115)(116), (136)(137)および 9.9, (150)(220), (12)(38)を参照されたい。

(54) *ecimo* *warat=too* *si=ga* *siawase=da=ga=ne*
いつも 笑う=CONT.NPST SI=NOM 幸せ=COP.NPST =SFP=SFP
いつも笑っている人が幸せだよ。

(55) *ora=ga* *kinnjo* *mikake-ta=no=wa* *ano* *san=da=zi*
1=NOM 昨日 見かける-PST=NMNL[10]=TOP あの SAN=COP.NPST=SFP
私が昨日見かけたのはあの人だよ。

(56) *kinnjo* *it-tot-ta* *bun=wa* *koo=daa*
昨日 言う-CONT-PST BUN=TOP これ=COP.NPST
昨日言っていたのはこれだよ。

(57) *soo=wa* *ora=ga* *eci=da*
それ=TOP 1=GEN ECI=COP.NPST
それは私のものだ。

木次方言では，これらの形式名詞の他に，主要部となる名詞を伴わず，動詞や形容詞の終止・連体形がそのまま項位置に立つことがある。これは動詞・形容詞の名詞化と捉えられるものである。ここでは，*ora=ga=Ø=da*（1=GEN=NMNL=COP）「私のだ」のような場合も含めて，音形のない形式名詞が，動詞や形容詞，連体詞，属格助詞の後にあるものと見ておく。8.7.3，9.4 も参照。

(58) *motto* *ookina=Ø=ga* *i-i=wa*
もっと 大きな=NMNL=NOM 良い-NPST=SFP
もっと大きなのが良いな。

[10] この=*no* は標準語から借用した新しいものと考えられ，木次方言では本来このような名詞化形式はない。

4. 動詞・動詞句

4.1 動詞の構造

規則的な活用型として，子音語幹型（C 型）と母音語幹型（V 型）がある。C 型の語幹末子音は k, g, s, t, b, m, r, w である。C 型の動詞（C 動詞）には，*kak-u*（書く），*das-i* //das-u//（出す），*tob-u*（飛ぶ）など，おおよそ標準語の C 動詞（五段動詞）が所属する。V 型の語幹末母音は i と e である。V 型の動詞（V 動詞）には，*mii* //mi-ru//（見る），*okii* //oki-ru//（起きる），*nee* //ne-ru//（寝る）など，おおよそ標準語の V 動詞（上一段・下一段動詞）が所属する。

C 型のやや不規則な型を C'型とする。古典語のナ行変格活用動詞にあたるもので，所属動詞は *sinoo* //sin-oru//（死ぬ），*inoo* //in-oru//（去る・帰る）の 2 語である。また，V 型に近い活用をする不規則動詞として *kuu* //ku-ru//（来る），*sii* //si-ru//（する）がある。

表 7 に活用形を示す[11]。C 型は *kak-u*（書く），C'型は *sin-oo*（死ぬ），V 型は *mi-ru*（見る）で代表させる。表にも示すように，基本形が /ru/ で終わる形は語中・語末の /ru/ が長音化する規則（2.3.2 参照）により，表層では *sinoo, mii, suu* などのようになる。C 型の r 動詞も *kii*（切る）などとなる。また，w 動詞で w の前が a の動詞は，au > aa という音韻規則（2.3.3 参照）により，表層では *kaa*（買う），*utaa*（歌う）などとなる。

C 動詞・C'動詞が過去 *-ta* 形，中止 *-te* 形，継続 *-tor-u* 形，および *-te* 形に由来する形をとるときは語幹末子音が保たれない，いわゆる音便形をとり，また，一部において接辞頭の t が d になる。表 8 に C 動詞・C'動詞の語幹末子音別の語例と音便形を示す。k 動詞の音便形の例外は表に示した *ik-*（行く）のみである。s 動詞は，*dasi-ta* など ..si の形（連用形）と，*dai-ta* などいわゆるイ音便の形がある。他の西日本方言や中央語史上では「足す」「貸す」など 2 拍のアクセント類別上 1 類で音便形が起こりにくいことが知られているが（福島 1992, 国立国語研究所 1991 など），木次方言では「足す」も *tai-ta* となり，今のところ例外形が得られていない[12]。また，w 動詞は *kaa-ta* などウ音便形とみなせる形と，*kat-ta* など促音便形とがある。前者においては，この方言が au > aa という（形態）音韻規則を持つために西日本方言に多くみられる *koo-ta* ではなく *kaa-ta* となる。既に述べた通り，基本形でも w の前が a の動詞は表層形が *kaa*（買う），*utaa*（歌う）である。

表 7 のうち否定形より下の活用形は，さらにテンス等に応じて活用する形である。否定形 *-n* は不規則な活用をする（8.4.1 参照）。丁寧形 *-mas-* の活用については未確認である。使役・受身・可能形は V 型，尊敬形の //-nahar-//, //-rassjar-// は C 型，//-rare-// は V 型の活用をする。継続形 *-tor-* は C 型，希望 *-ta-* は形容詞型の活用をする。

---

[11] 動詞語幹と接辞の境界は，*kak-u/mi-ru, kaka-nai/mi-nai* のように V 型動詞を基準に認定する。

[12] 「越す」の *-ta* 形について話者 C に確認を試みたが，動詞自体が使いにくいとのこと。また，この方言では「貸す」は *kase-ru, kase-ta* のように V 型である。

表 7. 動詞の活用[13]

	C 型 *kak*（書く）	C'型 *sin*（死ぬ）	V 型 *mi*（見る）	不規則 *ku*（来る）	不規則 *si*（する）
基本	*kak-u*	*sinoo* //sino-ru//	*mii* //mi-ru//	*kuu* //ku-ru//	*sii* //su-ru//
過去	*kai-ta*	*sin-da*	*mi-ta*	*ki-ta*	*si-ta*
意志[14]	*kak-a*	*sin-a*	*mi-jo* *mi-ra*	*koo* *ko-ra*	*sjoo*
推量	*kak-u=dara(a)*	*sinoo=dara(a)* //sino-ru=dara(a)//	*mii=dara(a)* //mi-ru=dara(a)//	*kuu=dara(a)* //ku-ru=dara(a)//	*sii=dara(a)* //su-ru=dara(a)//
命令	*kak-e*	*sin-e*	*mi-re* *mii*	*koi*	*se(e)*
禁止	*kak-una*	*sinoona* //sino-runa//	*miina* //mi-runa//	*kuuna* //ku-runa//	*siina* //su-runa//
中止	*kai-te*	*sin-de*	*mi-te*	*ki-te*	*si-te*
仮定	*kak-ja(a)* *kak-a(a)*	*sin-ja(a)* *sin-a(a)* *sino-rja(a)*	*mi-rja(a)* *mi-ra(a)*	*ku-rja(a)* *ko-rja(a)* *ku-ra(a)*	*sjaa*
否定	*kaka-n*	*sina-n*	*mi-n* *mi-ran*	*ko-n* *ko-ran*	*se-n*
丁寧	*kaki-mas-u*	*sini-mas-u*	*mi-mas-u*	*ki-mas-u*	*si-mas-u*

使役	*kak-asee*
	//kak-ase-ru//
		sin-asee
		//sin-ase-ru//
			mi-sasee
			//mi-sase-ru//
			mi-rasee
			//mi-rase-ru//
				ki-sasee
				//ki-sase-ru//
					補 *sasee*
					//sase-ru//

受身	*kak-a(r)ee*
	//kak-are-ru//
		sin-a(r)ee
		//sin-are-ru//
			mi-ra(r)ee
			//mi-rare-ru//
				ki-ra(r)ee
				//ki-rare-ru//
				ko-ra(r)ee
				//ko-rare-ru//
					補 *saree*
					//sare-ru//

可能	*kak-a(r)ee*
	//kak-are-ru//
	kak-ee
	//kak-e-ru//
		sin-a(r)ee
		//sin-are-ru//
		sin-ee
		//sin-e-ru//
			mi-ra(r)ee
			//mi-rare-ru//
				ki-ra(r)ee
				//ki-rare-ru//
				ko-ra(r)ee
				//ko-rare-ru//
					補 *dekii*
					//deki-ru//

[13] 本稿では，屈折のほか，接語（=*dara(a)*）の付加，受身・使役など生産性の高い文法的な派生を含めて，「活用」としている。
[14] 限られた場合にのみ推量の意を表す。8.3.1 の確認要求表現についての記述を参照。

尊敬	*kaki-nahaa*
	//kaki-nahar-u//
	kak-assjaa
	//kak-assjar-u//
	kak-a(r)ee
	//kak-are-ru//
		si-nahaa
		//si-nahar-u//
		kak-assjaa
		//kak-assjar-u//
		sin-a(r)ee
		//sin-are-ru//
			mi-nahaa
			//mi-nahar-u//
			mi-rassjaa
			//mi-rassjar-u//
			mi-ssjaa
			//mi-ssjar-u//
			mi-ra(r)ee
			//mi-rare-ru//
				ki-nahaa
				//ki-nahar-u//
				ko-ra(r)ee
				//ki-rare-ru//
				補 *oidee*
				//oide-ru//
					si-nahaa
					//si-nahar-u//
					補 *sassjaa*
					//sassjar-u//
					si-ra(r)ee
					//si-rare-ru//

継続	*kai-too* //kai-tor-u//	*sin-doo* //sin-dor-u//	*mi-too* //mi-tor-u//	*ki-too* //ki-tor-u//	*si-too* //si-tor-u//
希望	*kaki-tai* *kaki-tee* //kaki-ta-i//	*sini-tai* *sini-tee* //sini-ta-i//	*mi-tai* *mi-tee* //mi-ta-i//	*ki-tai* *ki-tee* //ki-ta-i//	*si-tai* *si-tee* //si-ta-i//

補：補充形

表 8. C 動詞・C'動詞の語例と音便（過去 *-ta*）形

語幹末	基本 *-ru* 形の語例	過去 *-ta* 形の規則と語例，例外語
k	*kak-u*（書く） *ik-u*（行く）	..i-ta　例）*kai-ta*（書いた） 例外）*iki-ta*（行った）
g	*kog-u*（漕ぐ）	..i-da　例）*koi-da*（漕いだ）
s	*das-i* //das-u//（出す）	..si-ta, ..i-ta　例）*dasi-ta, dai-ta*（出した）
t	*tac-i* //tac-u//（立つ）	..t-ta　例）*tat-ta*（立った）
b	*tob-u*（飛ぶ	..n-da　例）*ton-da*（飛んだ）
m	*nom-u*（飲む）	..n-da　例）*non-da*（飲んだ）
r	*cii* //ci-ru//（散る）	..t-ta　例）*cit-ta*（散った）
w	*kaa* //kaw-u//（買う） *joo* //jow-u//（酔う）	..VV-ta, Vt-ta　例）*kaa-ta, kat-ta*（買った） 例）*joo-ta, jot-ta*（酔った）
n	*sino-ru* 死ぬ	..n-da　例）*sin-da*（死んだ）

4.2　動詞句の構造

4.2.1　補助動詞を伴う構造

中止 *-te* 形のあとに，語彙的意味を希薄化・変化させ文法的意味を表す補助動詞が付き，全体で述語として機能する動詞句構造として，次のようなものが得られている。

-te simaa //-te simaw-u//　「～てしまう」　完了。事態に対する消極的評価を伴う（8.6.1）

-te jaa, -ccjaa //-te jar-u//, *-te agee* //-te age-ru//　「～てやる」　与益（主語視点）（8.5.3）

-te gos-u　「～てくれる」　与益（補語視点）（8.5.3）

-te moraa //-te moraw-u//, *-te maa* //-te maw-u//　「～てもらう」　受益（8.5.3）

-te mii //-te mi-ru//　「～てみる」　試行

-te kuu //-te ku-ru//　「～てくる」　動作・状態を伴いながら基準点に近づく

(59) *kaeru=mo*　*sin-de*　*simat-ta*

蛙=ADD　死ぬ-SEQ　PF-PST

蛙も死んでしまった。

(60) *omai=ga*　*taore-rja*　*ora=ga*　*sewa=Ø*　*si-te*　*jaa=wa*

2=NOM　倒れる-CND　1=NOM　世話=ACC　する-SEQ　BEN.NPST=SFP

お前が倒れたら，俺が世話してやるよ。

(61) *ora=ga*　*kuc-cjaa=ka*

1=NOM　食う-SEQ.BEN.NPST=QP

（聞き手が嫌そうに物を食べているのを見て）私が食ってやろうか？

(62) *kase-ta*　*zen=Ø*　*modoi-te*　*gos-u=wa=noo*

貸す-PST　銭=TOP　戻す-SEQ　BEN-NPST=SFP=SFP

貸した金は返してくれるよね？

(63) *isja=ni*　*mi-te*　*moraa=wa=na*

医者=DAT　見る-SEQ　BEN.NPST=SFP=SFP

（私は）医者に見てもらうよ。

(64) *ano*　*wake*　*mon=ni*　*tego=Ø*　*si-te*　*maa-to*

あの　若い.NPST　MON=DAT　手伝い=ACC　する-SEQ　BEN.NPST-CND

i-i=no

良い-NPST=SFP

あの若い者に手伝ってもらうと良いね。

(65) *ima=no*　*mise=ni*　*kasa=o*　*wasure-te*　*ki-ta=ga*

今=GEN　店=DAT　傘=ACC　忘れる-SEQ　来る-PST=SFP

今の店に傘を忘れてきたよ。

(66) *omai=mo*　*cjokkosi*　*ki-te*　*mii*

2=ADD　ちょっと　着-SEQ　みる.IMP

おまえもちょっと着てみろ。

ほかに *-te gassjai, -te gohassjai, -te gosassjai* という命令形式がある。全て「～てください」にあたり，上の *-te gos-u* の語彙的な尊敬動詞の命令形だと思われるが，**-te gassjar-u* などの基本形や他の活用形は未確認である。

(67) *koko=ni*　*ot-te*　*gassjai*

ここ=DAT　いる-SEQ　BEN.HON.IMP

ここにいてください。

4.2.2 文法カテゴリの階層構造

主節末における動詞句に現れうる文法カテゴリをその生起順に表 9 に示す。ヴォイス～テンスは有標形のみを表に記した。*-ru* はムードの欄に断定形としたが，すべての文法カテゴリにおける無標形でもある[15]。ムードのうち断定形と推量形は平叙文と疑問文を作り，意志・勧誘・命令・禁止形はそれぞれの文タイプを作る。後者は極性・テンスを分化しない。

表 9 の形にさらに任意で終助詞（8.7.4）が付く。

表 9　文法カテゴリの階層構造

<table>
<tr><th>語幹</th><th>ヴォイス</th><th>アスペクト</th><th>極性</th><th>テンス</th><th>ムード</th></tr>
<tr><td rowspan="3">kak
mi</td><td rowspan="3">使役-受身 -sase-rare
可能 -rare</td><td rowspan="3">継続 -tor</td><td>否定 -n</td><td>過去 -ta</td><td>断定 -ru
推量 -ru=dara</td></tr>
<tr><td colspan="3">ムード</td></tr>
<tr><td colspan="3">意志 -ru=ka, -a/jo
勧誘 -ra/jo=koi
命令 -re
禁止 -runa</td></tr>
</table>

[15] 例文を示す際は，動詞の *-ru* 形についてテンスにおいて過去 *-ta* との対立をなすことを重視して，NPST（非過去）というグロスを与えた。後述の形容詞 *-i* 形，コピュラ=*da* 形，動詞否定 *-n* 形なども同様。

5. 形容詞・コピュラ

5.1 形容詞・形容詞述語

形容詞の活用型は 1 つである[16]。表 10 に「高い」を例として活用形を示す。

表 10. 形容詞の活用

	taka（高い）
基本	*taka-i, take(e)* //taka-i//
過去	*taka-katta*
推量	*taka-i=dara(a), take(e)=dara(a)* //taka-i=dara(a)//
中止	*taka-te* *takaa-te* //taka-V-te//[17]
仮定	*taka-kerja(a)* *taka-kera(a)*
否定	*taka-i=koto na-i* *taka-i=kota na-i* *taka-Ø na-i*（稀） *takaa na-i*（稀）
なる	*taka-ni naa, taka-n naa* //taka-ni nar-u// *taka-Ø naa* //taka-Ø nar-u//（稀） *takaa naa* //taka-V nar-u//
副詞	*taka-i=koto* *taka-ni*
丁寧	*taka-Ø gozaimas-i*

基本形 //-i// は語幹末母音と融合して実現することが多い。語幹末 a のときは ai [ae~aę] または e(e) [e~eː]，語幹末 o のときは *osoe*（遅い）など oe [oe~oę] または *ose(e)*など e(e) [e~eː]，語幹末 i のときは *sizisi(i)*（涼しい）など i(i) [ɨ~i~ɨː~iː]，語幹末 u のときは *noki(i)*（温い）など i(i) [ɨ~ɨː] となる[18]。

標準語の *-ku* に対応して，*-Ø*（中止，否定，なる），-V（語幹末母音の長音形；中止，否定，なる），*-ni*（なる，副詞），基本形 *-i=koto* などが現れる点に特徴がある。

---

[16] 「無い」「良い」など短い形容詞では不規則な活用をする可能性があるが，未確認。

[17] 2.1 で述べたように，長母音は同じ母音音素が 2 つ並ぶものとして解釈する。ここでは「語幹末の母音を長音化する」という形態音韻規則を簡潔に表すために，V を用いて表記した。//taka-V nar-u// の場合も同様である。

[18] 名詞や動詞で /ai, oi/ が [e(:)]，/ui/ が [i(:)] と実現することは基本的にない（2.3.3）。この母音融合は形容詞-*i* 形のみで起きやすいようである。

(68) *kami=ga* {*naga-Ø / naga-n*} *nat-ta*
髪=NOM {長い-ADVL / 長い-ADVL} なる-PST
髪が長くなった。

(69) *motto* *take=koto* *moci+age-na*
もっと 高い.NPST=ADVL 持つ+上げる-NEG.CND
もっと高く持ち上げなければ（ならない）

5.2 コピュラ・名詞述語

名詞述語はコピュラ =*da* で作られる。その活用を表 11 に示す。*sizika*（静か）など形容名詞（学校文法の形容動詞語幹）に付く場合は，一部の活用形で普通名詞とは異なる形をとる。

表 11. コピュラの活用

	名詞(N)=*da*	形容名詞(N)=*da*, =*na*
基本終止	N=*da*	AN=*da* AN=*na*
連体	N=*na* N=*no*	AN=*na*
過去	N=*dat-ta*	AN=*dat-ta* AN=*nat-ta*
推量	N=*dara(a)*	AN=*dara(a)*
中止	N=*de*	AN=*de*
仮定	N=*nara*	AN=*nara*
否定	N=*da na-i*	AN=*da na-i*
なる	N=*ni naa*, N=*n naa* //N=ni nar-u//	AN=*ni naa*, AN=*n naa* //AN=ni nar-u//
副詞	（欠）	AN=*ni*
丁寧	N=*des-i*	AN=*des-i*

(70) *jappa* *menda=na=ken* *kaka-n*
やっぱり 面倒=COP.NPST=CSL 書く-NEG.NPST
やっぱり面倒だから書かない。

(71) *sizika=dat-ta / sizika=nat-ta*
静か=COP-PST / 静か=COP-PST
静かだった。

6. 連体詞・副詞・感動詞

6.1 連体詞

連体詞は屈折をせず，名詞句の修飾に専ら用いられるものである。7 節で述べるように指示語と疑問語は複数の品詞に跨って分布し，その中に連体詞も含まれる（例 72）。その他にも，例えば *okkena*～*ookena*～*ookina*，*okkjan*「大きな」が頻繁に用いられるものとして挙げられる（例 73）。

(72) *kinnjo* *omai-san=ga* *ose-te* *goi-ta* *ano* *hon=Ø* *moo* *jon-da=zi*
昨日 お前-HON=NOM 教える-SEQ BEN-PST あの 本=ACC もう 読む-PST=SFP
昨日あなたが教えてくれたあの本はもう読んだよ。

(73) *taroo=wa* *ookena* *oto=o* *kii-ta*
太郎=TOP 大きな 音=ACC 聞く-PST
太郎は大きな音を聞いた。

6.2 副詞

副詞は連体詞と同様に語形変化をしない。大きく *roociki*「たくさん」，*occirato*「ゆっくりと」や *joo*「よく（頻繁に）」のように動作や状態の様子や物事の数量・程度を表す様態の副詞（例 74）と，否定要素と呼応する *kaisiki*「全く」や話者の推測を表す *ookata*「おそらく」などの陳述の副詞（例 75）とがある。このほか，形容詞や形容名詞が副詞的に用いられ，動作や出来事の結果を表す場合もある（例 76 [=68] を参照）。

(74) *otocii=wa* *jokee* *non-de* *joo-ta*
一昨日=TOP たくさん 飲む=SEQ 酔う-PST
一昨日はたくさん飲んで酔った。

(75) *kaisiki* *nat-tora-n*
全く なる-CONT-NEG.NPST
全くなってない。

(76) *kami=ga* {*naga-Ø / naga-n*} *nat-ta*
髪=NOM {長い-ADVL / 長い-ADVL} なる-PST
髪が長くなった。

6.3 感動詞

感動詞としては，応答などの際に用いる *a*「あ」や *in.ja*「いや」[19]などがある。

[19] *in.ja* は，コピュラを伴い， *in.ja=da=wa* 'いや=COP=SFP'「違うよ」という形で使われることもある。

(77) *a*　*omai=Ø*　*doko=Ø*　*ik-u=no*

あ　2=TOP　どこ=ALL 行く-NPST=SFP

（道で友人にばったり会って）あ，お前どこ行くの。

(78) *in.ja*　*taroo=wa*　*sara=o*　*mee-da=wa*

いや　太郎=TOP　皿=ACC　割る-PST=SFP

（「太郎は湯呑みを割ったの？」に対して）いや，太郎は皿を割ったんだよ。

7.　指示語と疑問語

指示語と疑問語とは，表 12 に示すように複数の品詞に跨って分布する。

表 12. 指示語・疑問語の体系

	近称	中称	遠称	疑問
代名詞 1（一般）	*kore ~ ko(o)*	*sore ~ so(o)*	*are ~ a(a)*	*dore ~ do(o)*
代名詞 2（物・人）	*koici*	*soici*	*aici* *konna*	*doici*
代名詞 3（場所）	*koko*	*soko*	*asiko*	*doko*
代名詞 4（方向）	*kocci*	*socci*	*acci*	*docci*
副詞	*koge*	*soge*	*age*	*doge*
連体詞 1（事物）	*kono*	*sono*	*ano*	*dono*
連体詞 2 （属性・状態）	*kogaa* *kogan*	*sogjaa* *sogan*	*agjaa* *agan*	*dogjaa* *dogan*
形容名詞[20]	*koge=na*	*soge=na*	*age=na*	*doge=na*

指示語の用法は，基本的には *ko*・*so*・*a* の三項対立であり，標準語と変わらない。指示対象が発話場の事物であるときは（現場指示用法），話し手側の事物には *ko* 系，聞き手側の事物には *so* 系，どちら側とも見なされない時は *a* 系が用いられる。

[20] ここでは，*koge=na* などを，指示副詞 *koge* にコピュラの連体形=*na* が続いたものとはせず，指示形容名詞として指示副詞とは独立したものと見る。D 氏との電話調査上でのやりとりから，「あの人は短気だ」という発話に対して *ano si=wa age=natta=ken=noo* ‘あの SI=TOP ああ= COP.PST=ADVS=SFP’「あの人は（昔から）そのようだった」というのが自然であるということが分かっている。この時の *age* の先行詞は形容名詞「短気（な）」であると考えられ，翻って，この場合の *age* も形容名詞と言える。一方，*age=datta* という場合の *age* の先行詞は，むしろ前文脈全体で，この場合の *age* は副詞（標準語の「そう」に対応）と言える。なお，この例文に見るように，この方言における指示副詞の文脈指示用法における *so* 系（*soge*）と *a* 系（*age*）の使い分けは，標準語と異なる。その詳細は不明だが，標準語であれば *so* 系しか用いられないような場合でも，*a* 系指示副詞の *age* が用いられることがある。

(79) *aa=wa*　　*ciki=da=jo*

あれ=TOP　月=COP=SFP

あれは月だよ。

(80) *kore=Ø*　　*mi-taa*

これ=ACC　見る-PST

これを見ろ。[21]

(81) *soo=Ø*　　*mise-ta*

それ=ACC　見せる-PST

それを見せろ。

文脈指示用法においては，*so* 系と *a* 系が用いられる。

(82) *kinnjo*　*hon=Ø*　*kat-te*　*jon-da=zi.*　*soo=ga*　*honni*　*tanosi-katta=zi*

昨日　本=ACC　買う-SEQ　読む-PST=SFP.　それ=NOM　本当に　楽しい-PST=SFP

昨日本を買って読んだよ。それが本当に楽しかったよ。

(83) *kinnjo*　*omai-san=ga*　*ose-te*　*goi-ta*　*ano*　*hon=Ø*　*moo*　*jon-da=zi*

昨日　お前-HON=NOM　教える-SEQ　BEN-PST　あの　本=ACC　もう　読む-PST=SFP

昨日あなたが教えてくれたあの本はもう読んだよ。

なお，*ko*系代名詞の提題形として*ka(a)*，*koa*，*kora*，*so*系の代名詞の提題形として*sa*，*sorea*，*sora(a)* がある。これらは *ko(o)=wa*，*so(o)=wa*・*kore=wa*，*sore=wa* の縮約形と考えられる。

(84) {*koa / ka*}　　*daa=ka=i*

{これ.TOP /　これ.TOP}　誰=QP=SFP

これは誰か。

疑問語には，表12に示したもの以外に，これまでの調査で，*daa*「誰」，*nan* ~ *nani*「何」，*nanbo*「幾つ・幾ら」，*nasite*「何故」，*ecu*「何時」が確認されている。

(85) *omai=Ø*　　*nani=Ø*　*kuu=no*

お前= TOP　何=ACC　食う.NPST=SFP

お前は何を食べる？

[21] 8.3.2 で述べるように，命令を表す形式として動詞の過去形が用いられることがある。(81)の例文も同様である。なお，動詞の過去形が命令を表すのに用いられる場合には，(80)のように末尾の母音 a が長母音で現れることがある。

なお，疑問語に=*ka*あるいは=*dai*を後続させることによって，不定語が作られる。

(86) *sawagasi-i=kedo*　　*nan=ka*　*aa=ka=i*
　騒がしい-NPST=ADVS　何=QP　ある.NPST=QP=SFP
　騒がしいけど，何かあるの？

(87) *ara*　*koko=e*　*nan=dai*　　*aa=ga=ne*
　あれ　ここ=ALL　何=QP　　ある.NPST=SFP=SFP
　（独り言で）あれ，ここに何かあるぞ。

8.　構文

8.1　基本語順・格配列・項の数

8.1.1　基本語順と格配列

この方言の基本語順は，自動詞主語・他動詞主語をまとめて S，直接目的語を O，二重目的語他動詞文における間接目的語を E で表せば，S(E)(O)V である。

木次方言の格配列パターンは，自動詞主語 S と他動詞主語 A とが同じ格標示（=*ga* / =*no*）となる一方，他動詞目的語 O がそれらとは異なる格標示となる（=*Ø*/ =*o*），主格対格型の格配列パターンである。

(88) *ora=to*　*akira=ga*　　*ik-u=ga=ne*
　1=COM　あきら=NOM　行く-NPST=SFP=SFP
　私とあきらが行くよ。

(89) *taroo=ga*　*terebi=Ø*　　*mi-too=wa*
　太郎=NOM　テレビ=ACC　見る-CONT.NPST =SFP
　太郎がテレビを見ているよ。

主格に有形の格標示が現れる一方，基本的には対格が無形となる，有標主格タイプの言語であると言える。なお，これまでの調査では，主語・目的語の有生性や動作主性や特定性などによって, 有標主格タイプの格配列から他のタイプの格配列に交代すると言える証拠は得られていない。

8.1.2　項の数による文の分類

8.1.2.1　１項文（SV）

主語と述語のみからなる 1 項文においては，述語の種類によらず，主語は=*no* / =*ga* で標示される。=*no* / =*ga* の区別については，3.4.2.1 を参照。

(90) {*sensee=ga / sensee=no*}　　*ko-rae-ta*

{先生=NOM / 先生=NOM}　来る-HON-PST

先生がいらっしゃった。

8.1.2.2　2 項文（AOV）

主語と目的語と述語からなる 2 項文においては，主語は=*no* / =*ga*，目的語は=*Ø* / =*o* で標示される。=*Ø* と=*o* の分布については，3.4.2.2 及び 8.2.1 を参照。

(91) *taroo=wa*　*joo*　*sara=o*　*meg-u=noo*

太郎=TOP　よく　皿=ACC　割る-NPST=SFP

太郎はよく皿を割るね。

(92) *taroo=ga*　*terebi=Ø*　*mi-too=wa*

太郎=NOM　テレビ=ACC　見る-CONT=SFP

太郎がテレビを見ているよ。[=89]

8.1.2.3　3 項文（AEOV）

他動詞主語（A）・直接目的語（O）・間接目的語（E）をとる非派生の 3 項述語としては，*jar-*「やる」などの授与動詞の他，*okur-*「送る」などが確認されている。この時，間接目的語となる E 項の格標示は=*ni*（与格）である。

(93) *taroo=wa*　*otooto=ni*　*zeni=Ø*　*okut-ta*

太郎=TOP　弟=DAT　金=ACC　送る-PST

太郎は弟にお金を送った。

8.2　情報構造

8.2.1　主題と焦点

主題化される要素は提題助詞=*wa* を伴うことが普通で，また，文頭に置かれる。

(94) *ano*　*sara=wa*　*taroo=ga*　*mee-de*　*simat-ta=ga=ne*

あの　皿=TOP　太郎=NOM　割る-SEQ　しまう-PST=SFP=SFP

あの皿は，太郎が割ってしまったよ。

ただし，=*wa* を伴わないこともある。どのような条件で=*wa* を伴うかどうかが決まるのかは不明であるが，やはり当該の名詞句は文頭に置かれる。

(95) *uci=n* *ko=Ø* *mainici* *ku-zi=ni=wa* *nee=wa*
うち=GEN 子=TOP 毎日 九-時=DAT=CNTR 寝る.NPST=SFP
うちの子は，毎日九時に寝るよ。

焦点化専用の形式と考えられるものはこの方言にはないが，(96)からは，焦点化された目的語には=*o* が付きやすいと考えられる。

(96) *taroo=wa* {*sara=o* / **sara=Ø*} *mee-da=wa=ne*
太郎=TOP {皿=ACC / 皿=ACC} 割る-PST=SFP=SFP
（「太郎は何を割ったの？」の答えとして）太郎は皿を割ったよ。

一方，焦点などの情報構造はイントネーション（アクセント句頭の上昇）でも表される。また，(97)のように焦点化された目的語が無助詞で現れることが許容される場合もある。焦点を表す際に，有形の助詞の付与とイントネーションという 2 つの手段がどのような関係するのかは不明である。

(97) *ima* *sake=Ø* *non-doo=ga*
今 酒=ACC 飲む-CONT.NPST=SFP
（「今何を飲んでいるの？」の答えとして）今，酒を飲んでいるよ。

目的語以外の要素が焦点化された際の格助詞などの現れについても調査ができていない。イントネーションとの関わりを含め今後の研究課題としたい。

8.2.2 とりたて

3.4.3 で既に述べたように，とりたて助詞は，=*mo*（累加），=*(n)dai*（極限），=*demo*（例示），=*nato*（例示），=*hodo*（限定），=*bakka(ri)*（限定），=*wa*（対比）が確認されている。これらが文中の様々な要素に続くことによって，当該の要素がとりたてられ，それに関連する他の事柄が暗示され，また特別な意味が加えられる。3.4.3 であげた例の他に以下のようなものがある。

(98) *ocja=dai* *dasa-n=ka*
お茶=EXT 出す-NEG.NPST=QP
お茶さえ出さないのか。

(99) *hon=nato* *jom-e*
本=EXPL 読む-IMP
本でも読め。

(98)では，例えば，食事をする店で席についたにもかかわらず，お品書きも運ばれてこず，お茶も出されないことに対しての「（当然出されて然るべきである）お茶さえ出さないのか」という含意がある。一方，(99)は，例えば，時間を持て余している子どもに対して，いくつかすべきことがある中の 1 つの例として「本を読むことでもしたらどうか」と提案をしている。

8.3 文タイプ

述語の形態・統語的特徴や韻律的手段により文タイプとして，平叙文・疑問文・命令文（および禁止文）・意志文・勧誘文を認めることができる。以下，平叙文以外について順に記す。最後に感嘆文についても触れる。ただし，感嘆文は，木次方言ではそれを成立させる特別な形態・統語的あるいは韻律的手段は認められず，平叙文の下位類を成すと考えられる[22]。

8.3.1 疑問文

典型的な疑問文，すなわち，話し手に情報が欠けており聞き手はその情報を持つと話し手が想定する文脈において聞き手にその情報を求める問いかけの文では(100)の形式が用いられる。いずれも疑問語疑問文・真偽疑問文ともに用いられる[23]。(100a)～(100d)の形式において文末イントネーションは上昇調・下降調どちらもとることができる。(100e)は上昇調を伴うもので，用いない話者もあることから新しい形式だと思われる。

(100) 問いかけ文の述語形式

a. 動詞・形容詞・名詞述語の非過去・過去形=終助詞 *ka(=ne, no, ja), ka=i(=ne, no)*
（例 101-108, 111）

b. 動詞の非過去・過去形=終助詞 *no, ne* （例 109-113）

c. 動詞の非過去形=終助詞 *tete(=ja)* （例 109, 110）

d. 動詞の中止形 *-te(=ja)* （例 112, 113）

e. 動詞・形容詞・名詞述語の非過去・過去形（＋上昇調）（例 103, 104, 111）

(101) *hanako=Ø asita=kara doko=e* {*ik-u=ka=i* / **ik-u=no*}
花子=TOP 明日=ABL どこ=ALL {行く-NPST=QP=SFP / *行く-NPST=SFP}
花子は明日からどこへ行くの？（聞き手≠花子）

(102) *hanako=wa omai=ni nani=Ø* {*it-ta=ka=i* / **it-te* / **it-ta=no*}
花子=TOP 2=DAT 何＝ACC {言う-PST=QP=SFP / *言う-SEQ / *言う-PST=SFP}
花子はお前に何を言ったの？

[22] Aikhenvald(2016: 154)は，感嘆文を平叙文・疑問文・命令文に比して通言語的にマイナーで，他の文タイプに統合されることも多いと位置づける。
[23] 疑問語については 7 節を参照。

(103) *kono* *zi=wa* *doge* {*jon=da*(*=ka*) / *jom-u=ka=i=no* / **jon=no*}
この 字=TOP どう {読む.NPST=COP(=QP) / 読む-NPST=QP=SFP=SFP / *読む.NPST=SFP}
この字はどう読むの？

(104) *kaa* *sin=tte* {*jon=da*(*=ka=ne*) / *jom-u=ka=ne*}
これ.TOP シン=QT {読む.NPST=COP(=QP=SFP) / 読む-NPST=QP=SFP}
（漢字を指さして）これは「しん」と読むの？

(105) *docci=ga* *take=ka=ne*
どっち=NOM 高い.NPST=QP=SFP
（2 つの品物の値段について店員に）どっちが高いの？

(106) *kocci=no* *hoo=ga* *take=ka=ne*
こっち=GEN ほう=NOM 高い.NPST=QP=SFP
（2 つの品物の値段について店員に）こっちのほうが高いの？

(107) *koa* {*daa=ka* / *daa=ka=i* / *daa=ka=ne*}
これ.TOP {誰=QP / 誰=QP=SFP / 誰=QP=SFP}
（友人が見せてくれた写真の中の一人を指して）これは誰？

(108) *kora* *taroo=ka*
これ.TOP 太郎=QP
（友人が見せてくれた写真の中の一人を指して）これは太郎？

(109) *doko=Ø* {*ik-u=no* / *ik-u=tete*}
どこ=DAT {行く-NPST=SFP / 行く-NPST=SFP}
（道で友人にばったり会って）どこに行くの？

(110) *omai-ci* *doko=Ø* {*ik-u=no* / *ik-u=tete*}
2-PL どこ=DAT {行く-NPST=SFP / 行く-NPST=SFP}
（道で複数の友人にばったり会って）お前たち，どこに行くの？

(111) *kore=Ø* {*kuu=no* / *kuu=ka* / *kuu=ka=ja* / *kuu*↑}
これ=TOP {食う.NPST=SFP / 食う.NPST=QP / 食う.NPST=QP=SFP / 食う.NPST}
（目の前の料理を指差して）これ，食べる？

(112) *omai=wa* *hanako=ni* *nani=Ø* {*it-te* / *it-ta=no*}
2=TOP 花子=DAT 何＝ACC {言う-SEQ / 言う-PST=SFP}
お前は花子に何を言ったの？

(113) *kinoo=no* *kai=wa* *omai=mo* {*de-te=ja* / *de-ta=no*}
昨日=GEN 会＝TOP 2=ADD {出る-SEQ-QP / 出る-PST=SFP}
昨日の会はお前も出たの？

非過去の名詞述語に(100a)の形を使う場合は，名詞に直接=*ka(=i)* が付く場合と，コピュラを介して付く場合がある。さらに終助詞=*ne* か=*no* が任意に後接する。既定の事態についての問いか

け文において，標準語では任意で準体助詞「の」を伴うが，この方言ではそのような「の（か）」疑問文に対応して，*=da(=ka)*（コピュラ=疑問の終助詞）という構造が用いられる（例 103, 104）。

(100b)(100c)(100d)については動詞の例しか得ておらず，形容詞・名詞述語において対応する形があるか未確認である。これらも疑問語疑問文・真偽疑問文ともに用いられる。注目すべきは(100b)(100c)(100d)の形は，主語が 2 人称（単数・複数とも）の場合にのみ用いられ，3 人称では例(101)(102)(103)に記したように不適格と判断されることである[24]。

(100b)の終助詞のうち*=no* は男性，*=ne* は女性が多く使うと話者に内省される（例文は*=no* で代表させた）[25]。この*=no, =ne* は(100a)の *=ka(=i)* に任意に後続する *=no, =ne* と同語で，広く諸方言に見られるナ行終助詞にあたると思われるが，*=ka(=i)* に続く場合は男性でも*=ne* が用いられることが多い。

(100c)の *=tete(=ja)* は，次の(114)のように，非難・詰問の文脈でも用いられやすい。(100d)の *-te(=ja)* 形は，(112)(113)にも記したように過去を表すもので，(100c)の非過去 *=tete(=ja)* 形と対立しているようである。

(114) *kogjan* *zikan=ni* *doko=e* *ik-u=tete.* *sugu* *modor-e=ja*
こんな 時間=DAT どこ=ALL 行く-NPST=SFP. すぐ 戻る-IMP=SFP
こんな時間にどこへ行くんだ。すぐに戻れよ。

反語文では*=ka=i* や*=da=i* が使われる。

(115) *sogjaa* *mon=Ø* *daa=ga* {*kuu=ka=i* / *kuu=da=i*}
そんな もの=TOP 誰=NOM {食う.NPST=QP=SFP / 食う.NPST=COP=SFP}
（ひどい料理を出されて）そんなもの，誰が食うか！

(116) *kogjaa* *mon=Ø* *kuw-aree=ka=i*
こんな もの=TOP 食う.POT.NPST=QP=SFP
（ひどい料理を出されて）こんなもの，食えるか！

自問には断定形や推量形に終助詞 *=ka(=na, no)* が後接した形が使われる（例 117, 118）。標準語であれば意志形が用いられる，1 人称主語の自問（例 118）や行為の提案（例 119。1・2 人称主語と言える）にも推量形が使われる点が特徴的である[26]。

---

[24] 主語が 1 人称の場合，また，名詞述語で主語が 2 人称の場合については未調査であり，今後の調査・検討が必要である。

[25] 例(109)など既定の事態を尋ねる文では標準語訳に準体助詞「の」を付したことから木次方言文の*=no* も準体助詞にあたるものと混同されやすくなってしまっているが，例(111)など，その場で判断を求める場合にも 2 人称主語であれば*=no* が現れることから，準体助詞でないことは明らかである。

[26] 本文で「自問」「行為の提案」とした場合，すなわち発話時に話し手が命題の真偽や行為の妥当性を検討している文脈において推量形が用いられるのであり，推量形が意志や勧誘を表すわけではない（意志文・勧誘文については 8.3.3, 8.3.4 参照）。

(117) *taroo=wa* *nani=Ø* {*kuu=ka=naa / kuu=daa=ka(=noo) / kuu=dara=ka(=noo)*}
太郎=TOP 何=ACC {食う=QP=SFP / 食う=COP=QP(=SFP) / 食う.NPST=INFR=QP(=SFP)}
（食堂でメニューを見ながら）太郎は何を{食うかな/食うのか（な）/食うだろうか（な）}。

(118) *nani=Ø* {*kuu=ka=naa / kuu=daraa*}
何=ACC {食う=QP=SFP / 食う.NPST=INFR}
（一人で食堂でメニューを見ながら）何を{食うかな/食おう}。

(119) *soode* *nani=Ø* *kuu=daraa*
それで 何=ACC 食う.NPST=INFR
（食堂でメニューを見ながら，聞き手に）さて，何を食おうか？

森山（1992）が「疑問型情報受容文」とした，発話時に得た新しい情報を示す文にも*=ka(=i)* が使われる。

(120) *haa* *ano* *si=ga* *juumee=na* {*jamada+sensee=ka / jamada+sensee=ka=i*}
へえ あの 人=NOM 有名=COP.ADNL {山田+先生=QP / 山田+先生=QP=SFP}
（「あれが山田先生だ」と教えてもらって）へえ。あの人が有名な山田先生か。

確認要求の文，すなわち，話し手が事態の真偽などについて見込みを持ちつつ聞き手に確認する文では[27]，推量形 *-ra, =daraa* に終助詞連続*=ga=no* や*=ga=ne* が続く形が用いられる。ほかに断定形に終助詞連続*=wa=no* や*=wa=ne* が続く形もある。(121)は命題の真偽について確認する文，(122)は話し手にとっては真であることが確かな事態について聞き手の認識を確認する文である。(123)のような聞き手への要求性を欠いた，話し手の認識変化を述べる文では断定形に*=ga=no* が続く。

(121) *anta=mo* *issjo=ni* {*ik-aa=ga=no / ik-u=wa=no*}
2=ADD 一緒=DAT {行く-INFR=SFP=SFP / 行く-NPST=SFP=SFP}
あなたも一緒に{行くだろう/行くよね}？

(122) *asuko=ni* *posuto=ga* *mie-ra=ga=ne*
あそこ=DAT ポスト=NOM 見える-INFR=SFP=SFP
あそこにポストが見えるだろう？

(123) *nani=Ø* *su-ru=tete.* *abunee=ga=no*
何=ACC する-NPST=SFP 危ない.NPST=SFP=SFP
何をするんだ。危ないじゃないか。

[27] 確認要求の文については三宅（1996, 2011: 211-232），日本語記述文法研究会（2003: 37-42）参照。

8.3.2　命令文・禁止文

命令文は動詞の命令形を用いて作られる。構造と用法から(124a)〜(124c)に区別できる。また(124d)〜(124f)は，形態的には叙述形だが語用論的に命令（command）を表す形式として慣用化している。

(124) 命令文を作る述語形式

a. 動詞の命令形 *-re*（4.1 参照）　（例 125-127）

b. 動詞の尊敬形 *-rassjar-, -ssjar-, -nahar-*の命令形 *-rassjai, -ssjai, -nahai*　（例 128, 129）

c. 動詞の中止形＋受益を表す補助動詞 *gos-*の命令形 *-te=gos-e*　（例 130）[28]

d. 動詞の基本形=コピュラ *-ru=da*　（例 125, 127, 129-131）

e. 動詞の否定仮定形 *-na, nja*　（例 132）

f. 動詞の過去形 *-ta*　（例 130, 133）

(125) *haja*　*oki-te*　*gakko=e*　{*ik-e(=jo) / ik-u=da=ga*}
早く　起きる-SEQ　学校=ALL　{行く-IMP(=SFP) / 行く-NPST=COP.NPST=SFP}
早く起きて，学校に行け（よ）。

(126) *moo*　*osee=ken*　*haje=koto*　{*ne-re / nee*}
もう　遅い.NPST=CSL　早い.NPST=ADVL　{寝る-IMP / 寝る.IMP}
もう遅いから，早く寝ろ。

(127) *koge*　{*se=ja / suu=da=wa=ne*}
こう　{する.IMP=SFP / する.NPST=COP.NPST=SFP=SFP}
こう{しろ/するんだよ}。

(128) *kogjan*　*zikan=ni*　*doko=e*　*ik-u=tete.*　*it-te*　{*mi-rassjai / mi-ssjai*}.
こんな　時間=DAT　どこ=ALL　行く.NPST=SFP.　言う-SEQ　{みる-HON.IMP / みる-HON.IMP}
こんな時間にどこへ行くんだ？　言ってみなさい。

(129) *soko=e*　{*iki-nahai / ik-u=da=wa=ne*}
そこ=ALL　{行く-HON.IMP / 行く-NPST=COP=SFP=SFP}
そこへ{行きなさい / 行くんだよ}。

(130) *kocci=Ø*　*ki-te*　{*gos-e / gosinai / goi-ta*}
こっち=ALL　来る-SEQ　{BEN-IMP / BEN.HON.IMP / BEN-PST}
こっちに〔来てくれ / 来てください / 来てくれ〕。

(131) *niku=ja*　*na-te*　*jasai=Ø*　*ku=da=wa=ne*
肉=COP.ADVL　ない-SEQ　野菜=ACC　食う.NPST=COP=SFP=SFP
肉じゃなくて野菜を食うんだよ。

[28] さらに *gos-* の尊敬命令形も使われる。形については例(130)および 8.5.3 参照。

(132) *motto* *kiree=ni* {*kaka-na / kaka-nja*}
もっと きれい=COP.ADVL 書く-NEG.CND
もっときれいに書かなければ（ならないよ）。

(133) *haje=koto* *koccii* *ki-ta*
早い.NPST=ADVL こっち.ALL 来る-PST
早くこっちに来い。

(124a)〜(124c)の命令形に任意で付加する終助詞として=*ja*（例 127）と=*jo*（例 125）がある。

(124d)は構造上は標準語の「のだ」に対応するが，この方言ではより熟した表現として高頻度で用いられる。コピュラ=*da* で言い切ることは稀で終助詞=*ga* や=*wa(=ne)* が後接するのが一般的である。(124e)は「〜なければならない」にあたる当為表現だが「〜なければ」にあたる否定仮定形のみで命令表現として慣用化している。(124f)は生産性が低く，(133)の *ku-*（来る），(130)の受益を表す補助動詞 *gos-* のほか *mi-*（見る），*mise-*（見せる）など限られている。限られた動詞で化石的に残っている古い表現だと思われる[29]。

行為を行わないよう要求する禁止を表す形として下の(134a)がある。ほかに(134b)〜(134d)が禁止表現として慣用的に用いられる。

(134) 禁止文を作る述語形式
a. 動詞の禁止形 *-runa*（4.1 参照） （例 135, 136）
b. 動詞の基本形=コピュラの中止形 否定の補助形容詞 *-ru=da na-i*（例 136）
c. 動詞の仮定形 動詞 *ik*（行）の可能否定形 *-ru-to ik-e-n* （例 137）

(135) *abune=ken* *rooka=Ø* *tonna*[30]
危ない.NPST=CSL 廊下=ACC 走る.PROH
危ないから廊下を走るな。

(136) *kaze=Ø* *hii-ta* *tokjaa* *dokko=dai*
風邪=ACC ひく-PST TOKI.TOP どこ=EXT
{*ik-una=ja / ik-u=da ne=zi*}
{行く- PROH =SFP / 行く-NPST=COP NEG.NPST=SFP}
風邪をひいた時は，どこにも{行くな／行くのではないぞ}

[29] この形がどのような性格の命令表現なのかの確認は不十分である。標準語にも「さあ，買った買った」などタ形による命令表現はあるが，木次方言の(124f)の形はそれとは性格が異なるように思われる。
[30] 基底形は //tob-una// で，表層において bu が後続の n の影響で撥音化したものと考えられる。

(137) *kono* *kusiii=Ø* *nom-u* *toki=wa* *hoka=no* *kusii=Ø*
この 薬=ACC 飲む-NPST TOKI=TOP 他=GEN 薬=ACC
nom-u-to *ik-e-n*
飲む-NPST-CND 行く- POT-NEG.NPST
この薬を飲む時は，他の薬を飲んではいけない。

(134a)には命令形と同様に終助詞=*ja* が後続しうる。命令形の(124b)（尊敬命令），(124c)（受益命令）に対応する禁止形は未確認。(134b)は命令表現の(124d)（基本形=コピュラ）に対応する表現と言えるが，禁止表現の場合は終助詞=*zi* が後接しやすい。(134c)は当為表現である。

8.3.3 意志文

話し手の近い未来の行為を確定的に述べる文を意志文とする。意志文を作る基本的な形は，動詞基本形に疑問・不定の終助詞が続く *-ru=ka* である。終助詞=*wa* を用いた *-ru=wa* も意志を表す文で用いられる。形容詞や名詞述語は意志文を作れない。

(138) *kutabire-ta=ken* *moo* {*nee=ka / nee=wa*}
疲れる-PST=CSL もう {寝る.NPST=QP / 寝る.NPST=SFP}
疲れたから，もう{寝るか / 寝るわ}。

標準語や日本語の多くの方言では古語の「未然形-む」に由来する C 語幹 *-oo*（例：*kak-oo* 書こう），V 語幹 *-joo*（例：*mi-joo* 見よう）などが意志文を作るが，この方言では「未然形-む」に由来する形 C 語幹 *-a*, V 語幹 *-jo, -ra* が，主節において単独で意志を表す形として用いられることはない[31]。ただし引用節においては *-(r)a, -jo* が単独で意志を表す形として用いられうる。

(139) *hitori=de* *ik-a=to* *omot-too=ga*
一人=INST 行く-VOL=QT 思う-CONT.NPST=SFP
一人で行こうと思っているよ。

8.3.4 勧誘文

話し手が聞き手に，近い未来に同じ行為を共同で行うことを求める文を勧誘文とする。勧誘文を作るもっとも基本的な形は，C 語幹 *-a,* V 語幹 *-jo, -ra* に終助詞=*koi* が続いた形である。ほかに *-a, -jo* に終助詞=*ja* が続く形も勧誘を表す。=*koi* はもっぱら勧誘を表す終助詞，=*ja* は他の文タイプでも用いられる終助詞である（8.3.2）。形容詞や名詞述語は勧誘文を作れない。

[31] *-a, -jo* に終助詞連続=*ka=na* または=*ka=no* が，話し手の行為についての自問を表すために用いられることもあるが稀であり，その場合も *-ru=ka=na* や *-ru=daraa* が用いられる。8.3.1(118)参照。

(140) *sjokuzi=ni* *ik-u=damo* *omai=mo* {*ik-a=koi / ik-a=ja*}
食事=DAT 行く-NPST=ADVS 2=ADD {行く-VOL=SFP / 行く-VOL=SFP}
食事に行くけど，お前も行こうよ。

8.3.5 感嘆文

感嘆文を表す特別な形はなく，述語の基本終止形・過去形に，終助詞=*na*, =*no*, =*ne* を長音化した=*naa*, =*noo*, =*nee* を付して感嘆の意を表すのが基本的である[32]。=*naa* が独り言で用いられる形式，=*noo*, =*nee* は聞き手に伝える形式である。

(141) *kinoo=wa* *joo* {*hut-ta=naa / hut-ta=noo / hut-ta=nee*}
昨日=TOP よく {降る-PST=SFP / 降る-PST=SFP / 降る-PST=SFP}
昨日はよく{降ったなあ/降ったねえ}。

8.4 極性

8.4.1 動詞

動詞の否定形は接尾辞 *-n* で表され，*-n* はテンス等に応じて不規則な活用（屈折）をする。表 13 に動詞の肯定・否定形の対立を C 動詞 *kak-*（書く）で代表させて示す。また，否定形の例文を(142)〜(149)に示す。V 動詞のうち *mi-*（見る），*ne-*（寝る）など語幹 1 拍の語では，いわゆる「一段動詞のラ行五段化」が起こった *-ran*, *-razatta* 形があるが，*oki-*（起きる），*ake-*（開ける）など 2 拍以上の語では *-ran* 形は用いられない[33]。

表 13. 動詞の極性による対立

	肯定	否定
基本	*kak-u*	*kaka-n*
過去	*kai-ta*	*kaka-zatta* *kaka-datta* *kaka-ndatta*
推量	*kak-u=dara(a)*	*kaka-n=dara(a)*
中止	*kai-te*	*kaka-nkoni* *kaka-nde* [34]
仮定	*kak-ja* *kak-a*	*kaka-na*

[32] 標準語の「アツッ」（熱い）など知覚した瞬間の驚きを表す場合の感嘆文については確認が不十分である。
[33] 出雲方言域において一段動詞のラ行五段化は出雲市など北西部で先行している（小西 2011，平子・友定 2018）。
[34] 『方言文法全国地図』第 4 集（国立国語研究所 1999）155 図「仕事に行かないで遊んでばかりいる」，156 図「子どもが仕事に行かなくて困った」における木次町西日登の回答による。

(142) *jappa* *menda=na=ken* *kaka-n*

やはり 面倒=COP.NPST=CSL 書く-NEG.NPST

やはり面倒だから書かない。

(143) *jakjuu=wa* {*mi-n=ga=ne / mi-ran=ga=ne*}

野球=TOP {見る-NEG.NPST=SFP=SFP / 見る-NEG.NPST=SFP=SFP}

（父は）野球は見ないよ。

(144) *sengeci=wa* *eega=Ø* {*mi-zatta / mi-razatta*}

先月=TOP 映画=ACC {見る-NEG.PST / 見る-NEG.PST}

先月は映画を見なかった。

(145) *kaze=wa* *hui-ta=kedo* *ame=wa* *hura-datta*

風=TOP 吹く-PST=ADVS 雨=TOP 降る-NEG.PST

風は吹いたけど，雨は降らなかった。

(146) *anma* *kikoe-ndatta=ga*

あまり 聞こえる-NEG.PST=ADVS

あまり聞こえなかったが...

(147) *kongeci=mo* *mi-ran=daraa*

今月=ADD 見る-NEG.NPST=INFR

今月も（映画を）見ないだろう。

(148) *jasin-de* *ora-nkoni* *sigoto=Ø* *see*

休む-SEQ いる-NEG.SEQ 仕事=ACC する.IMP

休んでいないで仕事をしろ。

(149) *eega=Ø* *mi-rana* *kane=wa* *kakara-n*

映画=ACC 見る-NEG.CND 金銭=TOP かかる-NEG.NPST

映画を見なければ，お金はかからない。

上の否定形のほかに，動詞に提題・対比助詞=*wa* が付き，さらに「する」の否定形が付いた，//(i)-wa se-n// からの派生形がある。いわゆる「とりたて否定形」である。*kakja se-n, mjaa se-n* など本来形の保持度が高い形と, *kaka-{s, h}en, mii-{s, h}en* などより縮約, 一語化が進んだ形で現れ，後者のほうが頻度が高い。関西方言ではこれに由来する形が既に基本的な否定形と化しているが，この方言では(150)(151)のように事態の恒常的な生起可能性を否定する文で用いられやすく，一回的事態を表す述語の否定では用いられにくい。

(150) *hanako=wa* *kogan* *toko=ni* {*kjaa se-n=ga=na / kii-sen=ga=na*}

花子=TOP こんな TOKO=DAT {来る.TOP する-NEG=SFP=SFP / 来る-NEG=SFP=SFP}

花子はこんな所に来はしないよ。

(151) *gokiburi=wa* *nakanaka* *sina-hen=ga*
ゴキブリ=TOP なかなか 死ぬ-NEG=SFP
ゴキブリはなかなか死なないよ。

8.4.2 形容詞・コピュラ

形容詞やコピュラはそれ自体の否定形を持たず，形容詞は *-i=kota* に形式形容詞 *na-i* を，コピュラは=*da* に形式形容詞 *na-i* を付加させて否定を表す。

(152) *hitoo=de* *asobi-ni* *de-temo* *omosi-i=kota* *na-i*
一人=INST 遊ぶ-ADVL 出る-CONC 面白い-NPST=ADVL NEG-NPST
一人で遊びに出ても，面白くない。

(153) *taroo=da* *na-i=ga.* *ziroo=ga* *hoe-too=ga*
太郎=COP.ADVL NEG-NPST=SFP. 次郎=NOM 泣く-CONT.NPST=SFP
太郎ではないよ。次郎が泣いているよ。

8.5 ヴォイス

8.5.1 使役

使役は，使役接辞 *-(s)ase-* を動詞語幹に接続して表され，使役者の項が主語として追加される。自動詞の使役文では，被使役者は対格=*o* か与格=*ni* で標示される。

(154) {*otooto=o* / *otooto=ni*} *aruk-ase-ta*
{弟=ACC / 弟=DAT} 歩く-CAUS- PST
（私は）弟を歩かせた。

調査協力者の直感によれば，被使役者を標示するのには対格=*o* が用いられるのが原則であり，=*ni* は，*-(s)asete jar-*「させてやる」という許可（・放任）を明示的に表す形式が現れる場合に用いることが多いという。強制・許可・放任といった違いに伴う表現の差異については，さらなる調査が必要である。

(155) *taroo=ga* *otooto=o* *asob-ase-too*
太郎=NOM 弟=ACC 遊ぶ-CAUS-CONT.NPST
太郎が弟を遊ばせている。

(156) *taroo=ga* *otooto=ni* *asob-ase-te* *jat-too*
太郎=NOM 弟=DAT 遊ぶ-CAUS-SEQ BEN-CONT.NPST
太郎が弟を遊ばせてやっている。

一方，他動詞を用いた使役文では，被使役者を標示するのに=*ni* しか用いられない。

(157) *taroo=ga* *otooto=ni* *hon=Ø* *jom-ase-too*
太郎=NOM 弟=DAT 本=ACC 読む-CAUS-CONT.NPST
太郎が弟に本を読ませている。

8.5.2 受身

受身は，接辞 *-(r)are- ~ -(r)ae-* を用いて表される。他動詞文からも自動詞文からも受身文を作ることができる。一般には，対応する能動文の目的語（間接目的語を含む）を主語とし，動作主は補語となり，=*ni* によって標示される。

(158) *taroo=wa* *minna=ni* *sik-are-too*
太郎=TOP みんな=DAT 好く-PASS-CONT.NPST
太郎はみんなに好かれている。

一方，*kikas-*「聞かせる」のような情報の伝達を表す動詞の場合，その受身文における動作主は =*kara* によって標示される[35]。

(159) *taroo=wa* *sono* *hanasi=o* *sensee=kara* *kikas-ae-ta*
太郎=TOP その 話=ACC 先生=ABL 聞かせる-PASS-PST
太郎はその話を先生から聞かされた。

また，受身文の主語が動詞の項とならない場合もある。この場合の動作主も与格=*ni* で標示される。以下は，いわゆる「持ち主の受身」と呼ばれる受身文である。

(160) *taroo=wa* *nosito=ni* *saihu=Ø* *tor-ae-ta*
太郎=TOP 泥棒=DAT 財布=ACC 取る-PASS-PST
太郎は泥棒に財布を取られた。

筆者らの調査では，間接受身文は誘導すれば発話される。しかし，動作主を主語にした能動文が可能であるならば，そちらを用いるのがより自然であるとされる。

[35] ただ，この場合は情報の受け取りを表す「聞く」という動詞を用いて *taroo=wa sono hanasi=o* {*sensee=ni* / *sensee=kara*} *kii-ta* '太郎=TOP その 話=ACC {先生=DAT / 先生=ABL} 聞く-PST'「太郎はその話を{先生に/先生から}聞いた」とする方がより自然なようである。

(161) *sekkaku* *seki=Ø* *tot-toi-ta=ni* *sira-n* *si=ni* *siwar-ae-ta*
せっかく 席=ACC 取る-SEQ.おく-PST=ADVL 知る-NEG.NPST SI=DAT 座る-PASS-PST
せっかく席を取っておいたのに，知らない人に座られた。

(162) *sekkaku* *seki=Ø* *tot-toi-ta=ni*
せっかく 席=ACC 取る-SEQ.おく-PST=ADVS
sir-an *si=ga* *ki-te* *siwat-ta*
知る-NEG.NPST SI=NOM 来る-SEQ 座る-PST
せっかく席を取っておいたのに，知らない人が来て，座った。

なお，この方言でも標準語と同様に，無生物を主語とする受身文も可能であるが，同内容を表す能動文が可能であれば，そちらを用いる方がより自然なようである。

(163) *kono* *tera=wa* *hjaku-nen+mai=ni*
この 寺=wa 百-年+前=DAT
{*tat-ta=ge=na* / ?*tate-rae-ta=ge=na*}
{建つ-PST=LCTN=COP.NPST / 建てる-PASS-PST=LCTN=COP.NPST}
この寺は百年前に{建ったそうだ / 建てられたそうだ}。

8.5.3 やりもらい

この方言におけるやりもらい（授与・受領及び恩恵の授受）に関わる表現をまとめると，以下の表 14 のようになる。

表 14：木次方言のやりもらい

	主語視点	補語視点
本動詞（授与）	*jar-* *age-*	*gos-*
補助動詞（与益）	*-te jar-* *-te age-*	*-te gos-*
本動詞（受領）		*moraw-*
補助動詞（受益）		*-te moraw-* *-te maw-*

jar-(*age-*) を用いた文と *gos-* を用いた文は，どちらも動作主が受け手に対して恩恵を与えることを表し，格配列は同じである。異なるのは視点で，前者では話し手の視点が主語（動作主）に，後者では補語（受け手）にある。

(164) *mago=ni*　*kocikai=Ø*　*jat-ta=wa*

孫=DAT　小遣い=ACC　与える-PST=SFP

（私は）孫に小遣いをやったよ。

(165) *taroo=wa*　*otooto=ni*　*e+hon=o*　*jon-de*　*jat-ta=ga=ne*

太郎=TOP　弟=DAT　絵+本=ACC　読む-SEQ　BEN-PST=SFP=SFP

太郎は弟に絵本を読んであげたよ。

(166) *mago=ga*　*purezento=Ø*　*goi-ta=ga=ne*

孫=NOM　プレゼント=ACC　くれる-PST=SFP=SFP

孫が（私に）プレゼントをくれたよ。

(167) *taroo=wa*　*ora=ni*　*e+hon=o*　*jon-de*　*goi-ta=ga=ne*

太郎=TOP　1=DAT　絵+本=ACC　読む-SEQ　BEN-PST=SFP=SFP

太郎は私に絵本を読んでくれたよ。

なお，*-te gos-* の命令形 *-te gos-e* は，行為指示（「〜てくれ」）として使われる（8.3.2）。4.2.1 で既に述べた通り，この *-te gos-* の語彙的な尊敬動詞の命令形（「〜でください」に相当する形式）として，*-te gassjai, -te gohassjai, -te gosassjai* がある。また，これらと同じように使われる形式として，尊敬接辞 *-nahar-*（の命令形）を伴った *-te gosi-nahai*，その縮約形と思われる *-te gosinai* もある（*-te gosinai* の例は例 130 を参照）。

(168) *kono*　*sake=Ø*　{*non-de gosi-nahai* / *non-de gohassjai* / *non-de gosassjai*}

この　酒=ACC　{飲む-SEQ BEN-HON.IMP /　飲む-SEQ BEN.HON.IMP /　飲む-SEQ BEN.HON.IMP}

この酒を飲んでください。

moraw- を用いた文は，それが本動詞として用いられる場合には動作主（与益者）が=*kara* あるいは=*ni* で表される。

(169) *tonaa=kara*　*daiko=Ø*　*morat-ta*

隣=ABL　大根=ACC　もらう-PST

隣（の家）から大根をもらった。

一方，*moraw-* を補助動詞として使う *-te moraw-*文・*-te maw-*文では，その本動詞が *okur-*「送る」などの物体の移動を意味する動詞でなければ，動作主を表すのには=*ni* しか用いられない。

(170) *sensee=ni*　*hon=Ø*　{*jon-de morat-ta* / *jon-de mat-ta*}

先生=DAT　本=ACC　{読む-SEQ BEN-PST /　読む-SEQ BEN-PST}

先生に本を読んでもらった。

8.5.4 可能

可能は，肯定の場合，受身と同じ接辞 *-(r)are-* を用いるか，C 型及び C'型動詞には *-e-* を用いる。能力可能と状況可能の区別はないようである。

(171) *joo* *sit-too=ken* *hitoo=de* {*ik-ee=wa=ne* / *ik-aree=wa=ne*}
よく 知る-CONT=CSL 一人=INST {行く-POT.NPST=SFP=SFP / 行く-POT.NPST=SFP=SFP }
（そこは）よく知っているから，一人で行けるよ。

(172) *kjoo=wa* *cjoosi=ga* *ee=ken*
今日=TOP 調子=NOM 良い.NPST=CSL
nambo=demo {*ik-ee=jo* / *ik-aree=jo*}
いくら=EXPL {行く-POT.NPST=SFP / 行く-POT.NPST=SFP }
今日は調子が良いから，どこまででも行けるよ。

(173) *kjoo=wa* *tenki=ga* *ee=ken* {ik-*ee=wa* / *ik-aree=ga*}
今日=TOP 天気=NOM 良い.NPST =CSL {行く-POT.NPST=SFP / 行く-POT.NPST=SFP }
今日は天気が良いから，行けるよ。

否定可能の場合には，肯定可能と同じ接辞に否定接辞を続けるか，副詞 *joo*「よく」＋（単純）否定形によって表される。以下の(174)の例について，話者の内省によれば，(174a)の場合は，途中までは上がっていきながら，途中で不可能となったことが含意され，(174b)の場合は，最初から上がることをしなかったことが含意されるという。その使い分けの詳細は不明である。

(174) (a) *tenki=ga* *waru-te* *oe=made* *(joo)* *agar-e-datta*
天気=NOM 悪い-SEQ 上=LMT (よく) 上がる-POT-NEG.PST
(b) *tenki=ga* *waru-te* *oe=made* *joo* *agara-datta*
天気=NOM 悪い-SEQ 上=LMT よく 上がる-NEG.PST
天気が悪くて（山の）上まで上がれなかった。

8.6 アスペクト・テンス

8.6.1 アスペクト

動詞の基本形 *-ru* が非継続相を表すのに対し，*-too* //-tor-u// が継続相を表す[36]。話者によっては *-cjoo* //-cjor-u// も用いる。西日本に広くみられる *-jor-u* 形はない[37]。*-ru* は，動詞の表す動作・変

[36] *-tor-u* 形は，多くの方言でそうであるように補助動詞構造 // -te or-u// の可能性があるが，そうみなせる根拠が得られておらず，ここでは接辞として扱う。
[37] ただし過去の習慣を表す次のような *-or-u* の例を得ている。詳細は確認が必要である。
mae=wa *kanpjoo=Ø* *cikuri-ot-ta=domo*
前=TOP 干瓢=ACC 作る-CONT-PST=ADVS
前は干瓢を作っていたが（もう今は作る者がいない）

化・状態の時間的な幅に関わりなくその成立を表す。動作・変化を表す動詞を用いて一回的な事態について述べる場合は，テンス的には近未来を表す。*-tor-u* は，動作・変化に時間の幅がある場合には視点時におけるその動作・変化の進行を表し（例 175），瞬間的に成立する動作・変化であれば成立後の結果の継続を表すことが多いが（例 176），時間の幅がある動詞について経験の効力を表すこともできる（例 177）[38]。習慣的な動作は *-ru* で表されることが多いが，*-too* のこともある（例 178）。形容詞やコピュラには継続形はない。

(175) *daa=ga* *hoe-too=ka=i*
誰=NOM 泣く-CONT.NPST=QP=SFP
誰が泣いているか？

(176) *ki=ga* *taore-too=wa*
木=NOM 倒れる-CONT.NPST=SFP
木が倒れているよ。

(177) *taroo=wa* *hanako=kara* *kari-ta* *hon=o* *moo* *jon-doo*
太郎=TOP 花子=ABL 借りる-PST 本=ACC もう 読む-CONT.NPST
太郎は花子から借りた本をもう読んでいる（＝読み終わっている）。

(178) *mainici* *otooto=ni* *kasi=Ø* {*jaa / jat-too*}
毎日 弟=DAT 菓子=ACC {やる.NPST/やる-CONT.NPST}
毎日弟に菓子を{やる／やっている}。

その他の有標のアスペクト形式としては，変化達成前の局面を表す *-kake-ru*, *-soo=da*, 事態の完了を話し手の事態評価とともに表す *-te simaa* //-te simaw-u// がある。

(179) *gokiburi=ga* *sini-kake-too=wa=i*
ゴキブリ=NOM 死ぬ-PROS-CONT.NPST=SFP=SFP
ゴキブリが死にかけているよ。

(180) *cikamaa-soo=ni* *nat-ta=domo* *nantoka* *nige-te* *ki-ta*
捕まる- LCTN=COP.ADVZ なる-PST=ADVS なんとか 逃げる-SEQ 来る-PST
捕まりそうだったけど，なんとか逃げてきた。

(181) *kaeru=mo* *sin-de* *simat-ta*
蛙=ADD 死ぬ-SEQ PF-PST
蛙も死んでしまった。

[38] 『方言文法全国地図』236 図（国立国語研究所 1999）によると存在動詞 *ar-u* も「運動会がアットル」のようにトル形をとることができる。「（子供の足跡をみて）子供が歩いた」のような痕跡を表す用法については未確認。

次節で見る過去の *-ta* は，標準語と同様に，完了のアスペクト形式という性質も持つ。

(182) *omai+toko* *moo* *mame=Ø* *ue-hassjat-ta=ka*
2+TOKO もう 豆=ACC 植える-HON-PST=QP
あなたの家はもう前を植えなさったか。

「大根が刻んである」などの動作対象を主語とする結果継続の文については未確認である。

8.6.2 テンス

テンスの基本的な対立は，非過去形と過去形によるものである。動詞肯定形は *-ru* と *-ta*，動詞否定形は *-n* と *-zatta, -datta, -ndatta*，形容詞は *-i* と *-katta*，コピュラは=*da*, =*na* と=*dat-ta*, =*nat-ta* という対立を成す。

非過去形は現在の状態や属性（例 183, 184, および 8.6.1 節の例 175, 176），恒常的事態（例 185）を表す[39]。動作・変化を表す動詞の非過去形は一回的事態であれば近い未来を表す（例 186, 187）。時間的限定性による形態的対立はない。

(183) *tonaa=ni* *kawaige=na* *neko=ga* *oo=wa*
隣=DAT 可愛い=COP.ADNL 猫=NOM いる.NPST=SFP
隣にかわいい猫がいるよ。

(184) *kono* *heja=Ø* *noki=noo*
この 部屋=TOP 暖かい.NPST=SFP
この部屋は暖かいなあ。

(185) *baikin=wa* *neci=de* *sinoo*
ばい菌=TOP 熱=INST 死ぬ.NPST
ばい菌は熱で死ぬ。

(186) *soraa* *ora=ga* *sii=wa=ne*
それ.TOP 1=NOM する.NPST=SFP=SFP
それは私がするよ。

(187) *asita=Ø* *ame=wa* *hura-n*
明日=TOP 雨=CNTR 降る-NEG.NPST
明日は雨は降らない。

過去形の例を示す[40]。動詞の否定過去は 8.4.1 参照。

---

[39] 習慣的動作に *-ru* が用いられることは 8.6.1 節で述べたとおりである。
[40] 「あ，あった」のようないわゆる発見のタの用法については未確認。

(188) *kesa=wa*　*jo-zi+han=ni*　*oki-ta=ga=ne*
今朝=TOP　四-時+半=DAT　起きる-PST=SFP=SFP
今朝は四時半に起きたよ。

(189) *joku*　*mii-to*　*taroo=ga*　*arui-tot-ta*
よく　見る.NPST-CND　太郎=NOM　歩く-CONT-PST
よく見ると，太郎が歩いていた。

8.7　モダリティ

8.7.1　認識的モダリティ

認識的モダリティの基本的な対立は，話し手が事態を確かなものと捉えているか不確かなものと捉えているかによる。前者を断定形，後者を推量形とする。この対立は極性，テンスの分化より後に現れる。動詞や形容詞では断定形は無標（*-ru, -n, -ta, -i, -katta*），推量形は無標形に*=daraa*を付加する。コピュラは断定形*=da, =dat-ta* に対して推量形が*=dara(a), =dat-ta=dara(a)*である。

(190) *mooziki*　*modot-te*　*kuu=daraa*
もうすぐ　戻る-SEQ　来る.NPST=INFR
（花子の帰りが遅いと心配している人に）もうすぐ戻って来るだろう。

ただし，平叙文では不確かさを表すために推量形*=daraa* が用いられるのは運用上は稀で，可能性を表す*=ka=mo sire-n*（かもしれない）や，否定疑問*=da na-i=ka*（（の）ではないか）のほうがよく用いられる。疑問文では自問を表すために*=dara=ka* が用いられる（8.3.1 参照）。

(191) *asita=mo*　*ik=ka=mo*　*sire-n*
明日=ADD　行く.NPST=QP=ADD　知れる-NEG.NPST
明日も行くかもしれない。

(192) *hanabi+taikai=da*　*ne=ka*
花火+大会=COP.ADVL　NEG.NPST=QP
（道が混んでいることについて「何かあるのか」と尋ねられて）花火大会じゃないか？

ほかに認識的モダリティを表す形式で，エビデンシャリティーにも関わるものとして，物事の様子など根拠のある推定を表す*=ja(=na)*，伝聞を表す*=to* がある[41]。

[41] 「今日は花子が来るはずだ」「この声は太郎に違いない」など蓋然性の高い推量形式については未確認。

(193) *ora* *hutoo=de* *dekii=ja=na=ken*
私 ひとり=INST できる.NPST=PRSM=COP.NPST=CSL
（手伝いを申し出た人に）私ひとりでできそうだから。

(194) *tatak-ae-te* *hana=ga* *magat-ta=to=ja*
たたく-PASS-SEQ 鼻=NOM 曲がる-PST=HS=SFP
たたかれて鼻が曲がったってよ。

8.7.2 評価のモダリティ

話し手の事態に対する評価を表すモダリティ形式として，(195)の形式がある[42]。(195c)の *-nnan* は，否定仮定形 *-na* に動詞「なる」の否定形 *nara-n* が続く形（標準語の「-なければならない」相当形）に由来すると思われるが，縮約が進んで当為を表す接尾辞と化している。

(195) 評価のモダリティ形式
a. 望ましさ： 仮定形 *-r(j)a/-ru-to*＋形容詞 *i-i* （例 196, 197）
b. 他と対比しての望ましさ： 過去形 *-ta*＋形式名詞 *hoo*=主格 *ga*＋形容詞 *i-i* （例 198）
c. 当為： 否定仮定形 *-na*＋動詞「行く」可能否定形 *ik-e-n* （例 199）
動詞 *-nnan* （例 200）
d. 不必要： 否定譲歩形 *-demo*＋形容詞 *i-i* （例 201）
e. 不許可： 仮定形 *-ru-to*＋動詞「行く」可能否定形 *ik-e-n* （例 202）

(196) *osi=ni* *kono* *kusa=o* *jar-a* *i-i=wa*
牛=DAT この 草=ACC やる-CND いい-NPST=SFP
牛にこの草をやればいいよ。

(197) *aa=ni* *si-te* *moraa-to* *i-i=ga=no*
あれ=DAT する-SEQ BEN.NPST-CND いい-NPST=SFP
あいつに（仕事を）してもらえるといいがな。

(198) *hutoo=de* *iki-ta* *hoo=ga* *i-i=wa*
一人=INST 行く-PST 方=NOM いい-NPST＝SFP
一人で行ったほうがいいよ。

(199) *haja-koto* *ue-na* *ik-e-n=ga=ne*
早い-ADVL 植える-NEG.CND 行く-POT-NEG.NPST=SFP=SFP
（苗を）早く植えなければいけないよ。

---

[42] 「一人で<u>来てもよい</u>」などの許可の形式については未確認。

(200) *wabiki=Ø*　　*se-nnande*

茅葺き=ACC　する-OBL.SEQ

茅葺きをしなくてはいけなくて...

(201) *omai=ga*　　*ki=ni*　　*se-demo*　　*i-i=wa=na*

2=NOM　気=DAT　する-NEG.CONC　いい-NPST=SFP=SFP

お前が気にしなくてもいいよ。

(202) *kono*　*kusii=Ø*　*nom-u*　*toki=wa*　*hoka=no*　*kusii=Ø*

この　薬=ACC　飲む-NPST　TOKI=TOP　他=GEN　薬=ACC

nom-u-to　*ik-e-n*

飲む-NPST-CND　行く- POT-NEG.NPST

この薬を飲む時は，他の薬を飲んではいけない。

8.7.3　説明のモダリティ

標準語では，断定形に準体助詞ノ（=コピュラ「ダ」）を付加したいわゆる「のだ」形が事態を既定のこととして聞き手に説明するために用いられる[43]。木次方言では準体助詞が未発達のため，断定形に直接コピュラを付加して，標準語のノダ形と同じように説明のモダリティを表す。(203)は事態を別の事態と関連づけて説明する用法，(204)は関連づけのない用法である（例(203)(204)では準体助詞=*Ø* とする）。また，理由の接続助詞=*ken* を言いさしで用いることによって説明のモダリティを表すこともできる（例 205）。この用法は標準語の理由の助詞には言い換えにくい。

(203) *rjokoo=ni=demo*　*ik-ae-ta=Ø=da=wa=na*

旅行=DAT=EXPL　行く-HON-PST=NMNL=COP=SFP=SFP

（「隣のうち，誰もいないみたいだよ」と言われて）旅行にでも行ったんだよ。

(204) *cigi=wa*　*kono*　*botan=o*　*os-u=Ø=da=wa=na*

次=TOP　この　ボタン=ACC　押す-NPST=NMNL=COP=SFP=SFP

次はこのボタンを押すんだよ。

(205) *mannenhicu=Ø*　*ar-u.*　*sensee=ni*　*tegami=Ø*　*kak-u=ken.*

万年筆=TOP　ある-NPST.　先生=DAT　手紙=ACC　書く-NPST=CSL

万年筆ある？　先生に手紙を{書くんだ／#書くから}。

標準語のノダには「へえ，そうなんだ」など話し手がその事態を既定のこととして把握したことを表す用法もあるが，木次方言の=*Ø*=*da* はこの用法は持たないようで，基本形に疑問の終助詞=*ka* や終助詞=*no* を付けた疑問文が用いられる（例(206)および 8.3.1(120)）。

[43] 説明のモダリティについては日本語記述文法研究会（2003: 189-205）参照。日本語記述文法研究会（同）は形式名詞モノを用いた「遅れそうなときは連絡をするものだ」なども説明のモダリティとしているが，未確認。

(206) *hum* *omai=Ø* *hude=de* *tegami=Ø* *kak-u=no*
ふうん 2=TOP 筆=INST 手紙=ACC 書く-NPST=SFP
ふうん，お前，筆で手紙を書くのか。

8.7.4 終助詞

テンスとムードを分化した後に付く，非自立的な不変化詞を終助詞とみなす[44]。終助詞は用いられる文タイプと相互承接から，(207)のように大別できる。

(207) 文タイプと相互承接による終助詞の類

a. 文タイプが限定されており，ムード形式に直接付く： *=zo, =zi, =wa, =ga, =ka, =tete, =koi*

b. 種々の文タイプに生起し，ムード形式に直接付くか a の形式に付く： *=i, =jo, =ja*

c. 種々の文タイプに生起し，ムード形式に直接付くか a または b の形式に付く：
=no, =ne, =na

=zo, =zi は，標準語のゾ・ゼに似ており，話し手と聞き手の間に認識のギャップがある文脈で，聞き手が認識すべき情報を伝える場合に用いられる。平叙文専用で，断定形（およびそれらに対応する過去形）にのみ付く。*=zo* は最文末の例のみ得ているが，*=zi* には*=ne* が後続することがある。

(208) *sita=bakka* *mi-too-to* {*abunee=zo / abunee=zi*}
下=RST 見る-CONT-CND {危ない.NPST=ZO / 危ない.NPST=ZI}
下ばかり見ていると，危ないぞ。

(209) *moo* *ni-zi=da=zi=ne*
もう 二-時=COP.NPST=ZI=NE
（起こすと「朝っぱらからなんだ」と文句を言う人に）もう（午後）二時だぞ。

=wa は発話時の認識や判断を表す。断定形にのみ付き，*=i, =no, =ne, =na* が後接しうる。基本的に平叙文で用いられるが，*=no* や*=ne* を後接すると確認要求文でも用いられる（8.3.1 例(121)参照）。また，動詞基本形=コピュラ基本形（*-ru=da*）による命令文にも用いられる（8.3.2 例(127)(129)(131)参照）。(214)のように丁寧形に*=wa=i* が付くと，「発話時の認識や判断」という基本的意味から外れ，話し手の既有知識を聞き手に伝えることができる[45]。

[44] 本節では，言及対象である終助詞のグロスとして ZO, GA など当該形式を大文字で示したものを用いる。
[45] 丁寧形に付くワにおける同様の現象は近畿方言のワにもある（服部 1992）。

(210) *ara* *koko=e* *nan=dai* *aa=wa*

あら ここ=ALL 何=QP ある.NPST=WA

（独言で）あれ？ ここに何かあるわ。

(211) *hanazi=ga* *de-too=wa=no*

鼻血=NOM 出る-CONT.NPST=WA=NO

鼻血が出ているよ。

(212) *rjokoo=ni=demo* *ik-ae-ta=Ø=da=wa=na*

旅行=DAT=EXPL 行く-HON-PST=NMNL=COP=WA=NA

（「隣のうち，誰もいないみたいだよ」と言われて）旅行にでも行かれたんだよ。

(213) *soge* *sit=tete=ja.* *sira-datta=wa=i*

そう する.NPST=SFP=SFP. 知る-NEG.PST=WA=I

そうするのか。知らなかったよ。

(214) *ko=wa* *taroo=no* *sjasin=des-u=wa=i*

これ=TOP 太郎=GEN 写真=POL-NPST=WA=I

これは太郎の写真ですわ。

=ga は，これまでの想定と現実の事態とにギャップがある場合に用いられる。*=zo, =zi* と似るが，*=zo, =zi* が聞き手に認識すべき情報を伝える場合に用いられるのに対し，*=ga* は話し手自身が認識更新をしつつある場合にも使われる。断定形，推量形（*=daraa, -ra*）に付き，*=i, =no, =ne, =na* が後接しうる。基本的に平叙文で用いられるが，*=no* や*=ne* を後接すると確認要求文でも用いられる（8.3.1 節(121)～(123)参照）。また，単独で動詞基本形=コピュラ基本形（*-ru=da*）による命令文にも用いられる（8.3.2 節(125)参照）。

(215) *ara* *koko=e* *nan=dai* *aa=ga=na*

あら ここ=ALL 何=QP ある.NPST=GA=NA

（独言で）あれ？ ここに何かあるよ。

(216) *ara* *koko=e* *nan=dai* {*aa=ga / aa=ga=no / aa=ga=na*}.

あら ここ=ALL 何=QP {ある.NPST=GA / ある.NPST=GA=NO / ある.NPST=GA=NA}.

kii=Ø *cik-e=ja.*

気=ACC つける-IMP=SFP.

あれ？ここに何かあるよ。気を付けろよ。

(217) *soraa* *ora=no* *kasi=da=ga=i*

それ.TOP 1=GEN 菓子=COP.NPST=GA=I

それは私のお菓子だよ。

(218) A: *tego=Ø* *sjoo=ka*
手伝い=ACC する.VOL=QP
手伝おうか。
B: *ija* *i-i=ga=ne.* *ora* *hutoo=de* *dekii=ja=na=ken.*
いいえ いい-NPST=GA=NE 1 一人=INST できる.NPST=PRSM=COP.NPST=CSL
いや，いいよ。私一人でできそうだから。

=*ka* はそれ自体が不定・疑問を表す助詞であり，疑問文で用いられる。断定形のほか推量形に付く。非過去の名詞述語の場合は, 名詞に直接付くこともコピュラ=*da* の後に付くこともできる。=*i, =ja, =no, =ne, =na* が後接しうる。下に非過去の名詞述語の例と，=*ja* が後接する例をあげる。他の用例については 8.3.1 参照。

(219) *aa* {*nan=ka=i / nan=da=ka=i*}
あれ.TOP {何=KA=I / 何=COP.NPST=KA=I}
あれは何か？
(220) *honni* *agena* *toko=Ø* *ik-u=ka=ja*
本当に あんな TOKO=ALL 行く-NPST=KA=YA
本当にあんなところに行くのか？

=*tete* は 8.3.1 で述べたように，動詞の非過去形に付き，2 人称主語の疑問文で用いられる。終助詞 =*ja* が後接する。用例は 8.3.1 参照。

=*koi* は，勧誘文で用いられる動詞の意志形に付く。8.3.4 参照。

=*ja* は，下のように平叙文のほか，既に触れてきたように，=*ka* や=*tete, -te* の後に付いて疑問文で（8.3.1），命令形・禁止形の後に付いて命令文で（8.3.2），意志形に付いて勧誘文で（8.3.4）使われる。

(221) *tatak-ae-te* *hana=ga* *magat-ta=to=ja*
たたく.PASS-SEQ 鼻=NOM 曲がる-PST=QT=SFP
たたかれて鼻が曲がったってよ。

=*jo* は，下のように平叙文のほか，命令形・禁止形の後に付いて命令文で使われる（8.3.2）。ただし平叙文での=*jo* の使用は少なく，標準語の平叙文のヨの用法は上述の=*zo, =zi, =wa, =ga* に担われている。

(222) *taroo=wa* *oci=de* *jasun-doo=jo*
太郎= COP 家=INST 休む-CONT.NPST=YO
太郎は家で休んでいるよ。

=i は，終助詞*=wa, =ga* の後に，また，疑問文でコピュラ*=da* か疑問助詞*=ka* の後に現れる。*=i* の現れる環境が母音 a の後に限られていること，および，終助詞の相互承接においては*=ja* や*=jo* と対立する位置にあることから，*=ja* や*=jo* の母音が脱落したものだと考えられる。例は上の(213)(214)(217)(219)のほか 8.3.1 を参照。

=no, =ne, =na は，断定形に直接付くほか，終助詞*=zi, =wa, =ga, =ka, =i* の後に付く。必ず最文末に用いられる。*=no, =ne* は聞き手に伝達する場合に用いられ，*=na* は独話で用いられる。*=no* よりも*=ne* が丁寧で，女性も使いやすいと内省される。断定形に直接付くのは，8.3.5 で述べた感嘆文のほか，8.3.1 で述べた 2 人称主語の疑問文において*=ne* と*=no* が用いられる場合であり，標準語のネ・ナの用法とは大きく異なる。例は上の(209)(211)(212)(215)の他 8.3.1，8.3.5 を参照。

ほかに形式名詞が終助詞化したものとして次のような*=mono* がある。下の例では過去の習慣を表す*=mon* と終助詞化した*=mono*（MONO_{SFP}）が現れている。接続や意味・用法については不明である。また，理由の接続助詞が文末で用いられ，終助詞化の途上にあるとみられる（9.6）。

(223) *mukasi=wa* *take=de* *tojo=Ø* *kossjae-ta=mon=da=mono*
昔=TOP 竹=INST 樋=ACC 作る-PST=MONO=COP.NPST=MONO_{SFP}
昔は竹で樋を作ったものだよ。

8.8 待遇

8.8.1 尊敬

「主語に対する上位待遇」としての尊敬を表す形式は，接辞 *-(r)are- ~ -(r)ae-* の他，*-nahar-* と *-(r)assjar-* がある。これらの間の敬意の差については未調査である。

(224) *sensee=ga* *sinbun=Ø* *jon-dor-ae=wa*
先生=NOM 新聞=ACC 読む-CONT-HON.NPST=SFP
先生が新聞を読んでいらっしゃるよ。

(225) *ano* *kwasi=wa* *omai-han=ga* {*kw-asjaat-ta=ka / kun-nahat-ta=ka*}[46]
あの 菓子=TOP 2-HON=NOM {食う-HON-PST=QP / 食う-HON-PST=QP}
あの菓子はあなたがお食べになったのか？

また，中止形（*-te* 形）を用いた，いわゆる「テ敬語」も見られる。

[46] ここで，*kun-nahat-ta* が *kui-nahat-ta* でないのは，後続の接辞頭の鼻音要素によって *kuw-* の語幹末子音が鼻音化したもので，音声的なものだと考えられる。

(226) *ziisan=wa* *mainici* *roku-zi=ni* *oki-te=da=ken=noo*
お爺さん=TOP 毎日 六-時=DAT 起きる-HON=COP=ADVS=SFP
お爺さんは毎日六時に起きなさるからなぁ。

なお，「いる・来る・行く」の尊敬動詞としての *oide-*「いらっしゃる」という形式も確認されたが，その許容度には個人差があるようで，少なくとも D 氏はこの形式を用いないという。

8.8.2 丁寧

「聞き手への上位待遇」としての丁寧を表す形式には *-mas-* がある。

(227) *ima* *sinbun=Ø* *mi-too-mas-i=wa*
今 新聞=ACC 見る-CONT-POL-NPST=SFP
今，（私は）新聞を見ていますよ。

コピュラの丁寧形は=*des-i* である[47]。

(228) *ora=ga* *otooto=des-i=ga*
1=GEN 弟=POL-NPST=SFP
私の弟ですよ。

9. 複文

9.1 引用節

引用節は，(229)(230)のように，助詞=*to* または=*tte* で表される。=*tte* は発話内容の引用で用いられやすい。山陽側の広島方言や岡山方言では「言う」「思う」を主節述語とする場合の引用節が Ø（無助詞）で表されることが多いが，この方言では，(231)のような疑問助詞=*ka* で表される節で Ø になることがあるものの，(230)のような文では Ø にならない。

(229) *kaa* {*sin =to / sin=tte*} *jom-u=ka=ne*
これ.TOP {シン=QT / シン=QT} 読む-NPST=QP=SFP
この字は「シン」と読むの？

(230) *kora* *nan=da=tomoo=ne*
これ.TOP 何=COP=QT.思う.NPST=SFP
これ何だと思う？

[47] 5.1 の表 10 で見たように，形容詞の丁寧形などに *gozaimas(-i)*という形式を用いることもあるようだが，例えば(228)を *otooto=de gozaimas-i* のように言えるのかは不明である。

(231) {*ik-a=ka / ik-a=to*}　　*omot-cjoo*
{行く-VOL=QP / 行く-VOL=QT}　思う-CONT.NPST
行こうと思っている。

9.2　疑問節

疑問の副詞節は，(232)(233)のようにその事態が不確かであることを述べる場合にはコピュラ=*da* または=*na* に疑問助詞=*ja* を後接した=*da=ja*, =*na=ja* で表される[48]。これらは *dai* [dae~daẹ], *nai* [nae~naẹ] と実現することが多い[49]。(234)のように述語の項となる疑問の名詞節を作る場合は疑問助詞=*ka* が付き，さらに格が付与される。

(232) *jam-u=dai*　{*doge=na=ja / doge=nai / doge=dai*}　*wakara-n*
止む-NPST=QP　{どう=COP=QP / どう=QP / どう=QP}　分かる-NEG.NPST
（雨が）止むかどうか分からない。

(233) *daa=ga*　*ik-u=dai*　*wakara-n*
誰=NOM　行く-NPST=QP　分かる-NEG.NPST
誰が行くか分からない。

(234) *daa=ga*　*ik-u=ka=ga*　*mondai=da*
誰=NOM　行く-NPST=QP=NOM　問題=COP.NPST
誰が行くかが問題だ。

9.3　連体節

連体節は動詞・形容詞述語の場合は特別な標識をとらずに非過去・過去の断定形（*-ru, -i, -ta* など）で作られる。非過去の形容名詞述語では=*na*，名詞述語では=*no*，過去の場合=*dat-ta* が被修飾名詞に前接する。3.4.4 参照。推量形が連体節の述語になる例は得ていない。なお，連体節中の格標示については 3.4.2.1 参照。

(235) *terebi=Ø*　*mi-ran*　*hi=wa*　*na-i*
テレビ=ACC　見る-NEG.NPST　日=TOP　NEG-NPST
テレビを見ない日はない。

9.4　名詞節

3.4.5 および 8.7.3 でも述べたように，標準語のノのような名詞節を作る助詞（準体助詞）が木次方言では未発達で，(236)のように表層では述語や連体詞にそのまま格助詞や副助詞がつく（例

[48] (232)の *doge* など，基本終止が=*na* となる形容名詞の場合，疑問節でも=*na* をとることができる。
[49] 7 節で述べたように *dai* は *dare=dai=ga*（誰かが）など不定語を作る接語としても機能する。*dai, nai* は不定語および疑問副詞節を作る助詞として文法化していると捉えられる。

では準体助詞=*Ø* を仮定している）。(237)〜(238)のように物を表す名詞節は *bun*，事を表す名詞節は *koto* で表されることもある。(239)のように標準語ではノが自然な文でも *koto* が用いられることがある。

(236) *hutoo=de* *iki-ta=Ø=ga* *i-i=wa*
一人=INST 行く-PST=NMNL=NOM いい-NPST=SFP
一人で{行ったほう／行くの}がいいよ。

(237) *mottto* *ookina=Ø=ga* *i-i=wa*
もっと 大きな=NMNL=NOM いい-NPST=SFP
もっと大きなのがいいよ。

(238) *kinoo* *it-tot-ta* *bun=wa* *soo=da=ga=ne*
昨日 言う-CONT-PST BUN=TOP それ=COP.NPST=SFP=SFP
昨日言っていたのは，それだよ。

(239) *hutoo=de* *ik-u* *kota* *ja=da=wa*
一人=INST 行く-PST KOTO.TOP いや=COP.NPST=SFP
一人で行くのは嫌だよ。

9.5 仮定節

仮定条件は，動詞 *-rja(a), -ra(a)*形，形容詞 *-kerja(a), -kera(a)*形，コピュラ=*nara* 形で表される。(240)(241)は仮定節の事態も主節の事態も未実現の例，(242)(243)は仮定節の事態から主節の事態が恒常的に導かれる場合の例，(244)は反事実の仮定の例である。稀に(245)のように *-tara* 形も使われる。

(240) *jama=e* *ik-jaa* *sizisi-i=da* *ne=ka*
山=ALL 行く-CND 涼しい-NPST=COP.SEQ NEG.NPST=QP
山へ行けば涼しいのではないか。

(241) *ku-ra* *wakaa=wa=na*
来る.CND 分かる.NPST=SFP=SFP
来れば分かるよ。

(242) *kaaten=Ø* *sjaa* *soto=kara* *mi-rare-n*
カーテン=ACC する.CND 外=ABL 見る-PASS-NEG.NPST
カーテンをすれば，外から（人に）見られない。

(243) *udon=ja* *soba=nara* *jasi-Ø* *na-i=ka*
うどん=MUL そば=COP.CND 安い-ADVL NEG-NPST=QP
うどんやそばなら安くないか（＝安いのではないか）。

(244) *moo* *citto* *jasi-kera* *kat-ta=damo*
もう ちょっと 安い-CND 買う-PST=ADVS
もうちょっと安ければ，買ったのに。

(245) *taroo=ga* *taore-tara* *daa=ga* *sewa=Ø* *sii=ka=i*
太郎=NOM 倒れる-CND 誰=NOM 世話=ACC する.NPST =QP=SFP
太郎が倒れたら，誰が世話するのか

認識的条件（有田 2007 参照。話し手が真偽を知らない事態について真と仮定）では，標準語と同様にテンスを分化した形（動詞なら *-ru/-ta*）に*=nara* を付けて表されることもあるが，次のように *-rja(a), -ra(a)*も用いられる。

(246) *kono* *naka=kara* *hutocu* {*too=nara / tor-aa*} *doo=ka=i*
この 中=ABL 一つ {取る.NPST=CND / 取る-CND} どれ=QP=SFP
この中から一つ{選ぶなら／??選べば}どれ？

次のように，仮定条件ではなく，従属節の事態の後に主節事態が継起的に起こることを表す場合は，*-tara* が用いられる。

(247) *gokiburi=Ø* *tatai-tara* *ziki* *sin-da*
ゴキブリ=ACC 叩く-CND すぐ 死ぬ-PST
ゴキブリを叩いたら，すぐに死んだ。

9.6 理由節

当該事態が原因・理由となって主節事態が起こることを表す理由節は，助詞*=ken* で作られる。(249)のように判断（例では禁止）の根拠を表す場合にも*=ken* が使われる。*=ken* は(250)のように主節を伴わない用法もある。こうした「言いさし」の用法は標準語のカラにもあるが，*=ken* には(250)のように標準語のカラには置換しにくい，説明のモダリティの用法がある（8.7.3）。

(248) *kjoo=wa* *ame=da=ken* *anma* *o-kjaku-san=ga* *ko-n*
今日=TOP 雨=COP.NPST=CSL あまり HON-客-HON=NOM 来る-NEG.NPST
今日は 雨だから，あまりお客さんが来ない。

(249) *abune=ken* *rooka=Ø* *tonna*
危ない.NPST=CSL 廊下=ACC 走る.PROH
危ないから，廊下を走るな。

(250) *otooto=ga* *soto=de* *hoe-too=ken*
弟=NOM 外=INST 泣く-CONT.NPST= CSL
（「さっきから外を見て，どうしたの？」に対して）弟が外で泣いている{んだよ／?から}

9.7 逆接仮定節

主節に一般に想定されるのとは異なる事態が示される逆接仮定節は，動詞 *-temo*，形容詞 *-temo*，コピュラ=*demo* で表される。

(251) *araa* *okoi-temo* *nakanaka* *oki-hen=ga*
あれ.TOP 起こす-CONC なかなか 起きる-NEG.NPST=SFP
あいつは起こしてもなかなか起きはしないよ。

(252) *nambo* *taka-temo* *kaa=wa*
どれだけ 高い-CONC 買う.NPST=SFP
どれだけ高くても買うよ。

(253) *ara* *kjuukee=demo* *mizu=Ø* *noma-hen=ga*
あれ.TOP 休憩=COP.CONC 水=ACC 飲む-NEG.NPST=SFP
あいつは，休憩でも水を飲みはしないよ。

9.8 逆接節

確定した事態を表し，主節に一般に想定されるのとは異なる事態が示される逆接節は，(254)のように助詞 =*damo* で表されるのが一般的である。=*damo* には(255)のように主節を伴わない文末用法もある[50]。また，標準語のノニに対応するものとして(256)のように=*ni* が用いられる。

(254) *kono* *ko=Ø* *mada* *hose=damo* *zi=ga* *kak-ee=ken=nee*
この 子=TOP まだ 小さい.NPST=ADVS 字=NOM 書く-POT.NPST=CSL=SFP
この子はまだ小さいけれども，字が書けるからね。

(255) *moo* *citto* *jasi-kera* *kat-ta=damo*
もう ちょっと 安い-CND 買う-PST=ADVS
もうちょっと安ければ，買ったのに。

(256) *sekkaku* *ai-ni* *iki-ta=ni* *ora-dat-ta*
せっかく 会い-ADVL 行く-PST=ADVS いる-COP-PST
せっかく会いに行ったのに，いなかった。

[50] 例(254)は標準語のケドよりもノニの文末用法に対応する。本文に記したようにノニに対応するこの方言の形式には=*ni* があるが，=*ni* は文末用法で用いられにくい。

標準語のケドやガには逆接とは言い難い，前置きの用法もある。*=damo* もこれを表すことがあるが，この用法では*=damo* より*=ga* が用いられることが多い。

(257) *omai=wa* *taroo=o* *mi-too=ga* *nasite=ka=i*
2=TOP 太郎=ACC 見る-CONT=ADVS どうして=QP=SFP
お前は太郎を見ているが，どうして？

9.9 時間節

主節の事態が生起する時間を表す節は, 形式名詞 *toki*（時）に助詞*=wa* を付けた形で表される[51]。

(258) *nee=toki=wa* *nemaki=Ø* *kii=ken*
寝る.NPST=TOKI=TOP 寝巻=ACC 着る.NPST=CSL
寝るときは，寝巻を着るよ。

9.10 目的節

目的を表す節を作るために，接辞 *-ni* が用いられる。

(259) *ima=kara* *minna=de* *mesi=Ø* *kui-ni* *ik-u=damo*
今=ABL 皆=INST 飯=ACC 食う-PURP 行く.NPST=ADVS
omai=mo *ik-u=no*
2=ADD 行く-NPST=SFP
今からみんなで飯を食いに行くけど，お前も行く？

「あとで見るためにとっておく」などの目的節については未確認である。

9.11 様態節

主節事態に付随する動作・状態を表す様態節を作る形式として，数量程度を表す節を作る形式名詞 *hodo* や，*joo=ni*（形式名詞=コピュラ副詞形）がある[52]。また，『方言文法全国地図』41 図（国立国語研究所 1989）「食いながら（歩くな）」では，*kui-nagara* が回答されている。

[51] 名詞修飾節が名詞 *toki* を修飾するという分析も可能。
[52] *joo=ni* には「まるで自分でしたように自慢している」などの直喩による様態節を作る用法もあると思われるが未確認。なお音韻対応からすれば *joo* は**ja(a)*となるべきだが，現在得た例では *joo* である。

(260) *kuuri=wa* *abakan=hodo* *naa=ga=ne*
胡瓜=TOP 持て余す=HODO 成る.NPST=SFP=SFP
胡瓜は持て余すほど成るよ[53]。

(261) *ora=Ø* *cikagoo* *kui-sugi-n=joo=ni* *si-too=ga=ne*
私=TOP 近頃 食う-過ぎる-NEG.NPST=JOO=COP.ADVL する-CONT.NPST=SFP=SFP
私は最近，食いすぎないようにしているよ。

9.12 中止節

従属節が主節に並列されて積極的な意味関係を表さない中止節が *-te* で作られる。従属節と主節は(262)のように継起的な関係にある場合，(263)のように対比的な関係にある場合がある。動詞否定形の中止節は，*-nkoni* という特徴的な形で表される（8.4 参照）。

(262) *eega=Ø* *mi-te* *uci=ni* *modot-ta*
映画=ACC 見る-SEQ 家=DAT 戻る-PST
映画を見て，家に帰った。

(263) *aa=nja* *otooto=ga* *ot-te* *watasjaa* *an-san=ga* *or-u*
あれ=DAT.TOP 弟=NOM いる-SEQ 1.TOP 兄-HON=NOM いる- NPST
あいつには弟がいて，私は兄がいる。

(264) *terebi=Ø* *mi-nkoni* *hon=bakka* *jon-dor-u*
テレビ=ACC 見-NEG.SEQ 本=RST 読む-CONT-NPST
（花子は）テレビを見ないで，本ばかり読んでいる。

[53] *abakan* は「処理に困る」「有り余るほどある」「持て余す」の意（廣戸・矢富 1963: 23）。動詞**abak-u* の否定形に由来すると思われる。また，*hodo* はとりたて助詞（3.4.3）とみなすべきかもしれない。

略号リスト

- 接辞境界
= 接語境界
. 音節境界
+ 複合語境界
1 1 人称
2 2 人称
ABL ablative（奪格）
ACC accusative（対格）
ADNL adnominal（連体）
ADD additive（累加）
ADVL adverbializer（副詞化）
ADVS adversative（逆接）
ALL allative（方向格）
BEN benefactive（受益，与益）
CAUS causative（使役）
CLS classifier（類別詞）
CMP comparative（比格）
CND conditional（仮定）
CNJ conjunctural（接続）
CNTR contrastive（対比）
COM commitative（共格）
CONC conscessive（逆接仮定（譲歩））
CONT continuative（継続）
COP copula（コピュラ・繋辞）
CSL causal（理由）
DAT dative（与格）
DES desiderative（願望）
EXPL exemplification（例示）
EXT extreme（極限）
FOC focus（焦点）
GEN genitive（属格）
HON honorific（尊敬）
HS hearsay（伝聞）
IMP imperative（命令）
INFR inferential（推量）
INST instrumental（具格）
INT intentional（意志）
LCTN low certainty（推測）
LMT limitative（限界格）
LOC locative（所格）
MUL multiple（ 並列）
NEG negative（否定）
NMNL nominalizer（名詞化）
NOM nominative（主格）
NPST non past（非過去）
OBL obligative（当為）
PASS passive（受動）
PF perfect（パーフェクト）
PL plural（複数）
POL politeness（丁寧）
POT potential（可能）
PROH prohibitive（禁止）
PRSM presumptive（推定）
PST past（過去）
PURP purposive（目的）
QP question particle（疑問助詞）
QT quotative（引用）
RFL reflexive（再帰）
RPT repetition（反復）
RST restrictive（限定）
SEQ sequential（中止形）
SFP sentence final particle（終助詞）
SIM simultaneous（同時）
TOP topic（提題）
VOL volitional（意志）

参照文献

有田節子 (2007)『日本語条件文と時制節性』くろしお出版

五十嵐陽介 (2021)「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪薗晴夫・野田尚史・プラシャントパルデシ・松本曜（編）『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』22-48. 開拓社.

上野善道 (1981)「松江市方言のアクセント——付属語を中心に——」『日本海域研究所報告』13: 109-136.

上野善道 (2016)「出雲方言アクセント調査報告」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』 23-67.

国立国語研究所（編）(1989)『方言文法全国地図』第 1 集，大蔵省印刷局

国立国語研究所（編）(1991)『方言文法全国地図』第 2 集，大蔵省印刷局

国立国語研究所（編）(1999)『方言文法全国地図』第 4 集，大蔵省印刷局

小西いずみ (2011)「出雲方言における「一段動詞のラ行五段化」に関する覚書」『論叢国語教育学』7: 49-60.

友定賢治 (2008)『日本のことばシリーズ 32 島根県のことば』東京: 明治書院.

日本語記述文法研究会（編）(2003)『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版

服部匡 (1992)「汎性語の終助詞ワについて」『同志社女子大学学術研究年報』43(4): 267-281.

平子達也 (2016)「出雲方言における格助詞「ガ」と「ノ」について」木部暢子編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』69-77.

平子達也 (2017)「出雲地域 7 方言の名詞アクセント資料——1～3 モーラ語——」『實践國文学』91: 320-278.

平子達也 (2018)「外輪式アクセント 4 方言の複合名詞アクセントに関する資料」『駒澤国文』 55: 128-100.

平子達也・友定賢治 (2018)「島根県出雲市平田方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集(4) 活用体系(3)』（科研費報告書）, 77-86.

廣戸惇・矢富熊一郎（編）(1963)『島根県方言辞典』島根県方言学会

福島直恭 (1992)「サ行活用動詞の音便」『国語国文論集』（学習院女子短期大学国語国文学会）21: 1-14.

三宅知宏 (1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111-122.

三宅知宏 (2011)『日本語研究のインターフェース』くろしお出版

森山卓郎 (1992)「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59: 35-44.

Aikhenvald, Alexandra, Y. (2016) Sentence Types. In: Nuyts, Jan and Johan Van Der Auwera(ed.) *The Oxford Handbook of Modality and Mood*, 141-165. Oxford: Oxford Univ Press.